



名大トピックス

特別号 平成16年3月31日発行 名古屋大学総務部企画広報室 編集 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 Tel(052)789-2016
ホームページ URL <http://www.nagoya-u.ac.jp>

平成15年度 定年退官教授のことば



平成15年度 定年退官教授のことば

定年を迎えられ、この3月31日をもって退官される次の教授から、本学を去るにあたってのことばを頂きましたので、掲載します。

- | | |
|------------------------|--------------------------|
| 田 島 毓 堂 (大学院文学研究科) | 服 部 忠 (大学院工学研究科) |
| 梶 田 正 巳 (大学院教育発達科学研究科) | 宮 原 一 哉 (大学院工学研究科) |
| 伊 藤 高 義 (大学院法学研究科) | 毛 利 佳年雄 (大学院工学研究科) |
| 松 井 芳 郎 (大学院法学研究科) | 安 田 仁 彦 (大学院工学研究科) |
| 牧 戸 孝 郎 (大学院経済学研究科) | 安 田 幸 夫 (大学院工学研究科) |
| 手 塚 修 文 (大学院理学研究科) | 木 村 志 郎 (大学院生命農学研究科) |
| 藤 澤 肇 (大学院理学研究科) | 安 田 征 市 (大学院生命農学研究科) |
| 宝 谷 紘 一 (大学院理学研究科) | 若 杉 昇 (大学院生命農学研究科) |
| 山 下 廣 順 (大学院理学研究科) | 中 條 直 樹 (大学院国際開発研究科) |
| 中 島 泉 (大学院医学系研究科) | 山 田 幹 郎 (大学院国際開発研究科) |
| 水 谷 栄 彦 (大学院医学系研究科) | 平 井 勝 利 (大学院国際言語文化研究科) |
| 村 松 喬 (大学院医学系研究科) | 水 谷 泰 弘 (大学院国際言語文化研究科) |
| 松 村 悠 子 (医学部保健学科) | 佐々木 教 祐 (大学院環境学研究科) |
| 板 倉 文 忠 (大学院工学研究科) | 田 中 政 志 (大学院環境学研究科) |
| 一 宮 彪 彦 (大学院工学研究科) | 谷 川 恭 雄 (大学院環境学研究科) |
| 伊 藤 健 兒 (大学院工学研究科) | 伊 藤 正 之 (大学院情報科学研究科) |
| 岡 本 佳 男 (大学院工学研究科) | 金 吉 敬 人 (大学院情報科学研究科) |
| 後 藤 繁 雄 (大学院工学研究科) | 神 谷 紀 生 (大学院情報科学研究科) |
| 小 林 猛 (大学院工学研究科) | 森 滋 夫 (環境医学研究所) |
| 鈴 木 正 之 (大学院工学研究科) | 佐 藤 祐 造 (総合保健体育科学センター) |
| 高 橋 勝 六 (大学院工学研究科) | 高 橋 俊 彦 (総合保健体育科学センター) |
| 田 邊 忠 顯 (大学院工学研究科) | 宮 村 實 晴 (総合保健体育科学センター) |
| 架 谷 昌 信 (大学院工学研究科) | 中 野 紀和男 (生物機能開発利用研究センター) |

日々の行持、報謝の正道なるべし

田 島 毓 堂



1977年の秋、学生時代の指導教官だった松村博司先生はじめ、文学部開設に関わられた方々の創設以来の悲願であった国語学講座開設が認められた。新設の講座としては文学部最後であり、以後、新たな講座増設は無くなった。私は78年春、助教授として着任した。以来26年、いろいろなことがあったが、過ぎ去った日月は真に短い。

国語学講座は当時の文部省のやり方として教授・助教授・助手のそろった完全講座として開設された。しかし、実際には、国文学講座が助手ポストを返上して不完全講座化し、国語学の教授ポストは言語学の教授が使っていた。つまり、完全講座というのは名目だけで、国語学講座は私一人であった。国文学講座の附属であった。当時、人事については大変厳しく、学部内でポストの貸し借り等があり、簡単ではなかった。文学部の古傷であったいわゆる美学問題もその一端であり、実に難しく、新任にとってはよく分からなかった。当時、教員人事は全て採用人事であり、そのためには、ポストがあいていなければならなかった。昇任人事は古い方々ががんとして受け入れなかった。今昔の感がある。国語学講座が二人になったのは、それから10年以上経ってからであった。こんなことも文学部の歴史として記憶にとどめておきたいと思う。

最近、授業の持ち時間について授業時間を「負担」と考えて、その軽減について論議がかまびすしいが、私から見れば、何を脳天気なという思いしかない。私一人だった時期は卒業の単位が不足しないように、きちんと講座を開かなければならない。どこからも援助はないし、単位の取り方は今とは違って区分があり、融通は利かなかった。卒業時になって、単位不足が明るみに出るようなこともしばしばあった。教官側が気を配らなければならなかった。はっきり覚えはないが、今、ノルマと言われている倍の授業時間は持っていた。しかし、それを負担と感じたことは

ない。授業の中からは新たな発見もあった。

88年、当時の言語センターを中心に、「日本言語文化専攻」という大学院講座が、文学研究科の中に組織され、その一員に加えられた。文学部とは別々に会議があり、それは負担であった。しかし、大学院経営ということに不慣れた方々と一緒になって、いい勉強になった。それは、独立大学院国際開発研究科の開設に当初から関わるようになった経験とも合わせ、種々の領域の先生方と一緒にして事を成就するという貴重な経験にもなった。その後の学問上のおつきあいや人間としてのおつきあいかげがえのないものだった。特に、国際開発研究科の国際協力講座に協力教官として出講した11年は、私の日本語学（以前「国語学」と称していた）を単に日本語の枠にとどめておかなかった。国際文化協力講座に籍を置き、そこでこの講座に学問的に貢献するにはどうすべきか、勿論一人の人間のすることであり、文学部・文学研究科の仕事もある中で、どうすべきかを考えた。

私は以前から語彙論に興味を持っていた。コンピュータの発達にそれに拍車を掛けた。語彙は文化を反映する。この語彙研究を通して国際開発研究科に貢献しようとし、94年にそのアイデアを発表、翌95年に「比較語彙論の構想」を公表した。以後、この発展に全力を傾けた。幸い、多くの学生・留学生諸君に恵まれ、比較語彙論は順調に成長を遂げてきていると思う。退職を機に一層この気運を盛り上げ、続けていくために「公益信託田島毓堂語彙研究基金」を大学当局のご援助を得ながら開設する運びになった。思えば、26年は短かったが、日々挑戦であった。これが私の日々の行持であり、報謝の正道であった。

新しい息吹を感じる大学を後に

梶 田 正 巳



ここ数年間の名古屋大学、そしてその界隈は、驚くほど大きな変化の中にありました。わたくし個人にとっても、東山線に乗るため本山へといそいだ山手通りも、暮れからは大曽根経由の地下鉄にかわり、通勤がいきなりに楽になりました。もう一つは、昭和39年に名古屋城から引っ越した旧教育学部学舎が、大型改装で見違えるほど立派になり、快適な研究室で幸い1年間をお世話になりました。そして身分は国立大学の The last professor という素敵な名称を奇しくも頂戴することになっています。

近年のいちじるしい変貌は、自分のすごしてきた29年間という過去も、これからの名古屋大学、そして教育発達科学研究科の未来に対して、大きな期待、希望を自然に抱かせてくれます。新しい息吹を身近に感じながら、こうして停年を迎えることができること、たいへんに幸せだと思っています。素晴らしいタイミングで、特に寂しい気持ちはありません。先日の最終講義も、講義なのか何なのか、楽しくさせていただきました。

振り返ってみますと、大学生の4年間(S34-38)、大学院生として6年間(S41-47)、そして助教・教授としての29年間(S50-H16)、63年という人生のうちの39年が名古屋大学ですから、外国滞在の3年間を差し引いても、相当なウエイトです。大学、学部に感謝してもしすぎることはありません。

この間に出会ったよき師、よき友、さまざまな人々との絆で、ここまで来られたというのが実感です。多くの幸運が導いてくれました。大学に勤めた期間の主な研究活動や社会とのかかわりについては、名古屋大学大学院・教育発達科学研究科紀要(心理発達科学)2003,50,i-xxviiに詳しく述べましたので、ご関心の方は参考にいただければ幸いです。

研究者としての生き方の中心には、追究すべき「問い」を

立てるといことがありました。その都度、いろいろな問題意識をもって、追究してきた人生であったと思います。研究として論文や本になったものもありますが、残されたテーマもありました。これからはじまる第二ラウンド(?)では、どんな「問い」を立てるのか、それが今の課題です。

今後は、研究業績という視点からは少し距離をおいて、もっと自由にいろいろな「問い」を立て、取り組んでみたい、と思っています。具体的には、こんな問題意識、テーマにこだわりがあります。

第一ラウンドの研究生活を振り返って、内面に沈殿した大きな「疑問」とは、われわれヒトという種は本当に賢いのか、創造的な存在なのか、思考力は十分にあるのか?という疑いでした。

人間は驚くほどの学習能力を備えています。勉強に長時間取り組んでも飽きませんし、学習によって未知を既知にしたい強いエネルギーを持っています。しかし、考える力はそれほどでもない。すぐに気晴らししたくなる。持続力がありません。ちなみに、ADHDのAttention Disorderは今日では心的治療の対象ですが、注意のDisorderこそ人間の常態ではないか??そもそも考えはじめると、頭が冴えてきて眠れません。創造的に考えるということは、種の危機につながるかもしれません。昔、高名な哲学者が、人は考える葦だといったそうですが、考える葦なのでしょうか?

こんな「問い」は、七転八倒しても心理学の研究論文にはならない。そもそも科学的に実証すること自体が困難ですから、…。しかしというか、それゆえにこそ、「問い」を立てて挑戦してみると面白い。これからは、実証や検証にわずらわされることなく、こんなテーマにじっくり取り組んで、楽しみたいと考えています。皆様、お元気で活躍くださることを祈って、筆をおきます。

退官にあたって

伊藤 高 義



昭和38年(1963年)に名古屋大学(法学部)を卒業して助手に採用されて後は、昭和43年から滋賀大学に赴任した4年間を除いて、名古屋大学での生活でした。大学を卒業した時期は、交通事故損害賠償の裁判例が蓄積期に入って被害者救済も充実しはじめた時期でしたが、他方で、昭和30年代の神武景気、岩戸景気を経ての経済の高度成長期とともに生じた公害問題が深刻化する中で、公害規制の大幅な見直しがされて、昭和45年は公害国会ともいわれるように、公害対策基本法の改正をはじめとする公害諸規制が強化されてゆくとともに、各地での公害紛争にみられる深刻な被害救済に向けての動きがようやくはじまった時期でもありました(四日市ぜんそく判決～津地裁四日市支部昭和47年7月24日判決)。

こういった時代の中で、助手になった当時、一方で、指導教授の三宅正男先生の下に実体権と手続法が交錯する領域のいわば民法の基礎理論的な部分を生涯的研究のテーマとすることができたこと、他方で、名大に赴任されたばかりの森嶋昭夫先生のご指導を受けて、東大の加藤一郎先生が主催された公害研究会に学術振興会の流動研究員として参加したのを契機に、交通事故損害賠償法や公害の被害者救済制度といういわば新たな法と法理論の生成期に、東京での同年齢やその前後の多くの研究者、実務家との交流ができたこと、さらに学部内のその後も、理論構築や議論に活発な多くの研究者に囲まれたことなど、たいへん恵まれた環境において頂いた本学と学部、感謝の気持ちで一杯であります。

長い研究生生活の中でずっと持ち続けた一番大きな課題は、多くの法学研究者がそうであるように、なんといっても理論と実務の統合であります。私が初期に書き上げた論稿について、ある裁判官の方から、内容的には賛成されながらも相当に厳しい批評の載った庁報を送って頂き、理論

としては定着した通説に全く反するものであったための批判ではありましたが、実務家によって裁判はそのように行われているのだとの趣旨の指摘を頂いたことも、当時の駆け出しの者として、大変力強く感じたことを今更ながら思い起こします。逆に、かつて残したままにしておいた問題を、その後煮詰めないままにいて、最近になって実務家との協同のなかで、なお解決困難なままで対処せざるをえなかったことも、まだまだ楽しみが一杯というところではあります。多くの課題を残したままにしていた自分の責任を強く感じているこの頃でもあります。

また、学部の学生や院生諸氏からもいつも多くの示唆を受けて思い出深いことも多いのですが、2003年度に久しぶりに担当した1年生の基礎ゼミも思い出深いものとなりました。このところ声を弱らせて授業評価は「ききにくい」となってしまったのですが、幸いTAの方のリードがあって、内容そのものは大変有意義でした。ゼミは、大テーマを設定し、各報告者が個別テーマを見つけて報告するゼミで、やや負担が過大かと心配していたのですが、各報告者とも、難しい概念や技術の複雑な仕組みなどのわかりやすい説明、反対意見をうまく引き出した議論の進行など、具体的かつ理論につながるテーマであれば、1年生の人が、相当な理解力・議論する力・高い抽象能力を持つことを示したものとなりました。このような思い出を持って本学を去ることができるのも、大変恵まれたことだと思っています。

大学・学部に改めて感謝を申し上げますとともに、今後とも、名古屋大学が一層発展されますことを心からお祈り致しております。

激動の大学にあって不動でありたいこと

松井 芳郎



いま、名古屋大学は 名古屋大学だけではないが、独立行政法人化を前にして激動の中にある。それだけではない。私が属してきた法学研究科は、さらに2波の大波の渦中にある。いうまでもなく、ロー・スクールの設置とアジア諸国に対する法整備支援事業の推進がそれである。独立行政法人化とそれに伴うさまざまな施策が、大学の真の使命の遂行にとってプラスに働くとはとうてい思えないが、そのことはおくとして、私がいま去ろうとする法学研究科は、この大波にもまれてどこに向かおうとしているのだろうか。

1968年に私が赴任した頃の法学部は、もちろんいまに比べればはるかに小振りだったが、スタッフには2クセも3クセもある強者がそろっていた。学部立ち上げの中心となった長老の先生方がまだご健在で、発足の頃にさっそうと赴任した(であろう)若手がそのころの学部運営の中心だった。専門、学問方法論、思想信条など、彼らはどの点を取っても驚くほど多様だったが、少なくとも2つの考えを共有していたといえる。第1に、学問、とくに社会科学はけっして象牙の塔の営みではなく、その成果を通じて社会に働きかける実践の学でもあるということ、そして第2に、それにもかかわらずこうした実践は、最高度の学問的研究に裏打ちされたものでなければならないということである。このような観点から、名大法学部は全国の法学部の間においてユニークな成果を上げてきたし、また、このような観点に立つすぐれた研究者の養成にも貢献してきた。

ところが昨今の大学の激動は、率直に言ってこの2つのことの両立を著しく困難にしつつあるように見える。押し寄せる「社会的要請」に応えるために時間を取られて、本来それを裏打ちすべき学問研究が、い

つの間にかおろそかになっているのではないか。ロー・スクールといい法整備支援といい、こうした社会的要請に正しく応えることが大学の使命であることは明らかだが、しかし、それが「大学の」使命であるからには、そのことは深い学問的な研究に裏打ちされて始めて十全に果たすことができるものであることを忘れないようにしたい。

改めてこのようにいえば、誰もが、もちろんと答えるだろう。しかし、私自身はこの10年ほど学会関係の「外回り」が多くて法学研究科の雑用を十分に果たしてきたとはいえないが、その自分の経験からいっても、一心に雑用をやっていていつの間にか自分は学問をやっているのだと自ら誤認してしまうことがなかったとはいえない。ロー・スクールのためにユニークなシラバスを作成すること、あるいは法整備支援のための国際シンポジウムを開催することは、それ自体は学問ではない。ところが、このような雑用がいつの間にか自分自身の内部で学問の代替物となっていたかも知れないのである。もちろん、優秀な後輩の諸氏にとっては、このような雑用には数年のことであれば過去の蓄積で十分に対処できよう。しかし、過去の蓄積もいつかは枯渇する。そうなれば、大学が大学として社会的要請に応えることは、もはやできないのである。これは、他人事ではない。ある私立大学のロー・スクールに再就職する自分の自戒としても、激動の大学にあって不動でありたいことは、学問に対する真摯な姿勢であることを、もう一度確認したい。

私の研究遍歴

牧 戸 孝 郎



ちょうどいい機会なので、40年余(学生時代から数えて)にわたる私の名古屋大学での研究遍歴を振り返ってみたいと思う。

- (1) 学部で国際経済学のゼミへ まず、経済学部に進学したとき、国際貿易に関心をもち国際経済学のゼミを選ぶ。学ぶことが現実から離れすぎていて実感がわかない。
- (2) 大学院で会計学を専攻 そこで、大学院では実践的な会計学のゼミに入る。会計学の二大領域である財務会計と管理会計の二元論を展開し、修士論文で「減価償却」に適用する。指導教授からは評価されたが、やはり有用性という点からもの足りなさを感じる。
- (3) 日立で管理会計実務を経験 管理会計の実践に携わりたいと考え、修士課程終了後、日立製作所に就職する。そこで、管理会計の理論と実務が大きく乖離していること、そして実務においても、本当に役立つような手法が確立されていないことに気づく。
- (4) 再び管理会計研究に従事 指導教授の誘いもあり、大学に戻って再び管理会計の研究に従事する。長期的な観点から、管理会計を有用な学問に再構築しようと考える。二元的会計観から、これまで財務会計に依存しすぎていた管理会計を独立させようと試みる。
- (5) 管理原価会計論の展開 管理会計の主要領域である原価計算において二元論を展開し、『管理原価会計論』を著す。管理会計を有用なものに発展させるために、統計的管理図、ベイズ統計学、マルコフ過程、DP、LPなど各種の数量的な手法の適用を検討する。
- (6) 原価計算・原価管理の実態を調査 わが国有数の企業の原価計算・原価管理の実態を調査する。再び、管理会計の理論と実務が大きく乖離していること、実務において本当に役立つ手法が少ないことなどを実感する。特に、標準原価管理の評価が低いことに驚く。
- (7) 原価企画の実践を体験 原価企画の誕生後まもなく、いくつかの外資系企業で原価企画の実践を体験する機会を得る。効果の大きさから原価管理の革命的手法と認識する。
- (8) 無借金企業の研究 愛知の無借金企業を中心にインタビュー調査を繰り返して、無借金経営の本質を解明する。国際競争における間接金融の優位性について、示唆を得る。
- (9) 米国で欧米の管理会計を研究 カリフォルニア大学バークレー校で欧米の管理会計の研究に従事。日本のそれとの違いは文化・伝統の違いを反映していることを再認識する。
- (10) 主要産業の経営実態調査を実施 自動車、電機、工作機械、鉄鋼、造船、化学、医薬品、繊維など、わが国主要産業の経営実態を調査し、その特徴を産業別に明らかにする。
- (11) 経営管理ノウハウの海外移転を調査 日本企業のASEAN 諸国への進出に伴って生ずる経営管理ノウハウの移転の問題を、日系企業へのインタビュー調査を通して解明する。
- (12) 韓国・中国における経営管理の研究 韓国および中国における経営管理の実態をインタビュー調査により解明する。経営における文化・歴史の影響力の大きさを痛感する。
- (13) 日本経営管理標準の作成に参加 中部の有力企業を中心にトップをはじめ実務担当者が集まり、各社の経営管理ノウハウを日本経営管理標準にまとめあげる事業に参加する。
- (14) 日本企業の国際競争力の調査・研究 日本企業の国際競争力の問題を、アンケート調査やインタビュー調査を繰り返して、従来の原価低減や品質向上の観点からだけでなく、広く企業の経営戦略面あるいは経済の制度・インフラ面からも解明しようとしている。

名古屋大学を去るにあたって、日本型経営の再構築、環境管理会計の新たな展開、グループ連結経営の構築など、いくつかの重要テーマを積み残したことは残念である。が、これらを新しい勤務先における私の研究課題とするつもりである。

名大における思い出あれこれ

手塚修文



名大理学研究科の院生時代に職業病ならぬ“修行病”を体験した。ファイトクローム(PhC)には光受容体の機能以外にも酵素活性があるのではと言われていた時代である。当時の大学は貧乏のため換気設備のない冷暗室(4)で微弱緑色安全光を照らして、蛋白質SH保護剤のメルカプトエタノール(SH試薬)を添加した緩衝液を用いてPhCを抽出し、そのPhCには酵素活性はなく近傍の酵素の活性制御の機能を有することを解明した頃である。このSH試薬により腐卵の臭いに似た独特の嫌な臭いが漂っていた上記の冷暗室で、数年間実験を繰り返していたためか、ある時から身体中が痒くなり夜は眠れず、医者からは慢性蕁麻疹であると診断され悪戦苦闘した。当時、指導教授であった太田行人先生(現名誉教授)は自分の実験・研究の合い間に気分転換を兼ねて上記の私の体調を気遣ってか、東山一万歩コースの散歩に何回も私を誘って学問・人生・雑学などの話をされた。これは実験室では味わえない新鮮な喜びであり、のちの私の研究活動に大いに参考になったのである。

学振奨励研究員・私大非常勤講師・カリフォルニア大でのポストドクなどを経たのち名大農学部に着任して開始した研究で「太陽から地球へ到達する自然光中紫外線(near-UV; 300~400nm)は植物の生長に必須である」ことを学会で発表したところ、紫外線は害を及ぼすと妄信(?)している多くの研究者から狂人扱いされ、当時、我々のデータは余り信用されず正に四面楚歌の心境であった。その後、友人(東大を今年停年退官)が、岡崎の国立基礎生物学研究所の大型スペクトルグラフを用いて実験したところ、near-UVは植物の生長を阻害するどころか促進するという私と同様な結果を得た。狂人扱いされてから15年ぶりにやっと我々のデータは正しかったことが他人に確認され正に感慨無量であった。妄信の実態はどうも、自

然光とは大きく異なる条件下(自然光に無い短波長域、特に254nmの殺菌灯使用や自然光紫外線の波長域でも10~20倍の強いエネルギーの使用)における多くの実験結果の単純な鵜呑みに基づいている様である。

名大教養部改革に伴い誕生した情報文化学部へ、そして人間情報学研究科へ転属して、学部3・4年生、院生の指導と並行して、始めて学部一年生の指導にも関わったが、それこそ売れっ子のタレント並みの多忙を極めることになり驚いた。これには他部局の教官とは比較にならないほど大変であり不公平を実感した。最近ではこの不公平はある程度は改善されたものの、独立法人化後の名大における研究・教育のさらなる改善・発展を期待します。

名大の西南の隅に位置する圃場が、名大キャンパス構想では駐車場の予定になっていた。しかし、当時の情文学部長・博物館長・関係諸先生および総長・事務局長との話し合により、この圃場には植物種が多いため名大博物館野外観察園として博物館が維持・管理運営することになった。このための裏方として少しはお役に立てたこと、この観察園が名大の財産として未永く名大内外の人々に愛されること、を思うと心地良い新鮮な喜びでもある。

最後は理学研究科に所属したが、どの部局(農・情文・人情・理)においても、学部生・院生と一緒に苦楽を共にした紫外線と植物、植物生殖生理、人癌と植物ホルモン、植物と微生物、環境とストレスなどに関する永年の研究には多くの思い出がいっぱい詰まっている。

名大では研究・教育に専念できて幸せでした。今後は積み残した研究を何処かで暫く続けたいと思っております。今後の名大における独創的な研究・教育のさらなる発展をお祈り致します。永い間、有難う御座いました。

40余年間にわたる大学での生活を振り返って

藤 澤 肇



先日、地下鉄の中で、学生同志の会話が何とはなしに耳に入ってきた。理学部の学生と他学部の学生との会話のようで、「おまえは大学院に進学するのか」という間に、「理学部では実社会で役立つ研究をしているわけではないので、修士までは行くが、博士課程への進学は考えていない」という理学部とおぼしき学生の答えを耳にした。この会話を聞いた時、40数年前、京都大学理学部で生物学の研究をやろうとしていた頃のことを思い出した。

私が入学した当時、理学部には動物学科と植物学科があり、学生定員はそれぞれ10名であったが、実質的に在籍する学生の数は定員より遙かに少なく、動物学科の同級生は僅か5名であった。植物学科に在籍する学生はこれより更に少なかったと記憶している。生物学をやるつもりで理学部に入学した学生はほとんどいなかった時代であったのである。今日の生物科学の盛況ぶりを見るとまさに昔日の感がする。

ただ、学生が少なかった分、また、生物学がおおらかな学問でありえた分、学部での学生生活はきわめて快適であった。学部に入って今でも印象深く残っていることは、講義室の教卓のみならず、学生が座る机にも灰皿が置かれており、ある教授の講義では、1時間ほど講義をすると後は教官と学生がタバコを喫ながら議論して終わるという光景である。また、人類学、生態学の泰斗であった今西錦司(学生は尊敬の意味を込めて呼び捨てにしていた)の人類学の授業では、“片手に木の枝を持ったオーストラロピテクスとおぼしき生き物が洞窟の前に立っており、その足下にたき火の後がある”絵を学生に見せ、「君らはこの絵を見てどんなことを考えるんや。次の回に君らの考えをきく」と一言いってその日の授業が終了したことが鮮明に思い出される。ちなみに、今西錦司は次の講義で絵についての学生の話聞いたが、コメントするほどの価値のあ

ることを言った学生がいなかったためか、全く何も言わずに授業が終了し、この2回で人類学の講義は終わってしまったと記憶している。この善し悪しは別にして、学生を一人前として対応するおおらかさとアカデミズムを感じ、自分が大学生であることを実感できた出来事であった。

学生時代、生物学をやって将来生活してゆけるだろうかなど考えることすらなかったが、大学院を修了した1970年代初期は、理学、特に生物学や地質学、天文学などを専攻した学生にとっては“大学院は出たけれども”受け皿がほとんどないという受難の時代であった。就職先が無く1年余分に大学院に在籍したのち医学部に職を得た私は幸運であったほうで、同期生のかなりが高校の非常勤講師や予備校の講師をしながらろくろくして研究を継続していた。なぜそこまでして、研究をするのか?それは、研究が楽しくてしかたがなかったからの一言につきる。学部学生時に浴びた濃厚なアカデミズムがその支えとなっていたと感じざるをえない。

先の学生の会話を耳にし、翻って、自分が学生時代に受けたアカデミズムをせめてその雰囲気だけでも学生に伝えることができたであろうかと改めて思う。40年前と現在とでは学問の内容も社会的状況も異なり、自分が受けた大学での教育をそのまま現在に当てはめられないが、研究をすることが面白くて仕方がないと思う学生、研究者をどれだけ育てられたかを考えると甚だ自信が無い。

独法化を前に大学を去ることとなるが、これからの大学の姿があまり明瞭に見えて来ない。大学が社会へ貢献することは当たり前であるが、ただ、実用性、効率、採算性を度外視して研究をやる場を提供できるのは大学しかないし、その支えであるアカデミズムが希薄になってしまったら、大学としての存在基盤がなくなってしまうと思う。

Viva! 大学

宝 谷 紘 一



たぶん3昔以上も前のことだと思うのだが、“ショウほどすてきな商売はない”という映画が流行ったことがあった。退官を迎えて、「ショウ」を「大学教授」に置き換えたい気分である。

つとに有名な発生学者に岡田節人（ときんど）という趣味人が京大にいた。クラシック音楽にも造詣が深く、プロはだしの評論を書き、マーラーをこよなく愛した。2昔前の頃、彼曰く「宝谷はん。昔から芸者、医者、学者いうてなあ、“者”の付く商売は客あってなんぼやねん」。聞いて、“そんなバナナ、ウッソー”というのが当時の正直な気持ちであった。何しろ僕は、院生時代を名大理学部の特異なアカデミズムの中で過ごし、自然科学は生臭い人間生活から特に超越した存在であると信じていたからである。その背景には60年安保の挫折で味わった政治の“濁”から逃げるために、アカデミズムに“清”を求めていたのかもしれない。

以来、40年近く学者商売をしていると、節人さんの言葉がなるほどと思えてくる。とりあえず、職名には意味が隠れているらしい。音楽家、画家、小説家などの「家」人には芸術の匂いがする。弁護士、会計士、消防士などの士人には公の匂いがする。とすれば、者人である学者の客は何者か？客の多くは同業者である。客に「すごい！」「やるなあ～」「そうだったのか」と言わせるために日夜努力しているのだ。さらにその上をゆく超一流の仕事には、なぜか同業者以外の客までも付く。超難解の代表格の相対性理論だって、大正年間にアインシュタインが日本を訪れた時はすさまじい人出だったらしい。クォーク、超新星、DNAしかりである。誰も考えなかった新しい概念は人間の本能を刺激し、自然に客を引きつけるらしい。では、お前に客はついたんかと問われると、一般客はゼロに近い。でも、同業者の客には、本人が楽しんでやった仕事の雰囲気は伝わる

ものらしい。

学者の多くは、研究テーマを選ぶにあたって、「基本的」かつ「重要」であるか、時には「現代的」かと模索する。一般客までファンになるテーマはこれらの要件を全て満たしている。告白する。僕はこのような視点でテーマを選んだことは一度もない。移り気なのでテーマは次から次へと変えて来たのに、である。実験をすれば、予想もつかなかったテーマが偶然見つかることがある。それを進めて行って、結構面白い仕事になるのは、興隆期の生物学、中でも海のものとも山のものとも判らない生物物理学の分野に飛び込んだおかげであろう。学問は成熟し、体系化し、美しくなると、テーマ選びには深い思慮と洞察が不可欠になる。が、このような王道は、ほとんどカンを頼りに生きてきた僕のような人間には合わなかった。

偶然から派生した研究を自由気ままにやれたのは、大学にポジションを得たからである。企業の研究所では、御法度に近い。では国公立の研究所では如何か。僕に限って言えば、大学の研究者になれたのがラッキーであった。大学では研究所と違って、毎年4月になれば研究室の何人かの学部生・院生が必ず入れ替わる。古代より「このごろの若者は…」と言われるように、彼らはスタッフと違って新しくなりこそすれ、決して古くはならない。桜の下の新歓コンパは、ややもすれば流され鈍りがちな自分の感性をリフレッシュし、新年度のエネルギーを分けてもらう至福の機会である。

時代は変わっても、他と比べれば、大学の研究自由度の高さは群をぬき続けるであろう。近未来に、人が富にのみ頼らないライフスタイルを探る時、芸術やスポーツと共に、知的好奇心をそそるエンターテインメントとしての学問は集客力を増すだろう。権威に頼らない自由な大学であれば、この潮流の旗手になるだろう。Viva! 大学。

過去を顧み、未来に思いを馳せ

山下 廣 順



伊勢湾台風の襲来、安保闘争、大学紛争と名古屋大学入学以来の印象に残る出来事が先ず思い出されます。当時は、世界初の人工衛星の打上げを契機として、米ソの宇宙開発競争が繰り広げられ、アポロ計画による有人月探査へと発展していました。私の研究分野である X 線天文学は、1962年にロケット観測で宇宙 X 線が発見されたことによって切り拓かれました。我が国もロケットの自主開発と呼応して宇宙観測が計画され、1965年に名古屋大学は我が国初の宇宙 X 線のロケット観測に成功しました。これによって、地上観測に限られていた宇宙を探る目が大きく開かれたわけです。それを主導された故早川幸男（元名古屋大学長）先生のもとで鍛えられ、研究の厳しさを叩き込まれ、新たな研究のダイナミックな展開に魅せられて、定年までこの道を歩んできました。

近頃は、ロケットの打上げや衛星の失敗が続き、我が国の宇宙技術に対する批判が高まっていますが、これらに直接関わってきた一人として問題点が何処にあるかを考えさせられます。情報の氾濫とともに、表層的な事柄のみに目を奪われ、本質を見抜く思考が欠如しているようにも思われます。ロケット実験は10分間勝負です。打上げ前の発射台にセットされたロケットを見ると生き物のように感じられます。失敗すれば何も残らないという厳しい研究環境の中に身を置いてきました。極限状態の中で問題点を見つけだし、如何に解決するかが問われるわけですが、人知を超えたところに問題は潜んでいます。私の研究は、自らの手で観測装置を作り上げ、気球、ロケット、人工衛星に搭載して宇宙観測をすることにより宇宙を探究することですが、その一方で、危機管理を常に念頭において、のるかそるかの快感を追い求めていたようにも感じて

います。30数機の観測ロケットと6機の X 線天文衛星の打ち上げに関わってきましたが、2度の衛星打ち上げの失敗という苦い経験もしました。

1979年に名古屋大学を離れ、1992年に再び名古屋大学に戻りましたが、着任の半年前に恩師の早川先生が学長在任中に亡くなられたことが残念でなりません。この間に育んできた研究の芽を名古屋大学で開花させることを目指してきました。多くの若手研究者・学生に支えられ、彼らを教育・研究指導する中で、自由な発想の大切さを学びました。また、X 線望遠鏡の開発を推進するために、X 線結像光学を中心として、広汎な分野の研究者と共同研究をすることにより、広い視野から研究を深めることができました。漸く将来に向けての研究の展望が開けてきたところです。ブラックホールやダークマターについての研究成果が得られるのは5～10年先になるでしょう。この思いを若者に託して、退くことになりました。長期的な視点に立って観測機器の基礎開発を始め、国際的な競争と協調・協力のもとに研究計画を練り上げ、衛星とロケット技術がうまく噛み合っ、本来の目的が達成されるわけです。「宇宙の探究は、人類に夢を与え、知的好奇心を呼び起こすとともに、世のため人のためになる先端技術を創出する研究である」をモットーとして研究を進めてきました。これからは、宇宙観測のために開発してきた X 線光学技術が医療、生命科学等のブレークスルーにもなるよう、さらに新たな研究の展開を期待しています。

番外のセレンディピティ

中 島 泉



昭和14年に名古屋帝国大学として誕生し、昭和24年に新制名古屋大学となって半世紀余の今年の4月に本学は国立大学法人名古屋大学に生まれ変わります。この同じ時に、昭和40年に卒業した名古屋大学医学部をもう一度卒業するにあたり、一言ご挨拶申し上げます。

少し前に、医学部学友時報に基礎医学の研究者としての歩みを、私にとっての7つのserendipityとして紹介させて頂きました。免疫の働きを例外的に強く増強する細菌性物質の発見、免疫の働きを起動する抗原提示細胞の多元性の提示、メラノーマ自然発症トランスジェニックマウス系の樹立、T細胞情報伝達における膜ラフトの役割の解明、酸化ストレスシグナルのチロシンキナーゼ分子内の標的アミノ酸の同定、植物性天然物の免疫を介する腫瘍抑制効果の原発癌モデルにおける科学的証明、そして、免疫の新しい調節性細胞型の同定がそれです。これらのserendipityは、数多くの、恩師、同僚、学生との出会いと共同の中で遭遇したもので、免疫を調節する仕組みを明らかにして人為的に制御するという私の初心の一部となるものと考えます。

振り返って実感するのは、理念と方法が異なる領域の学問が交流することの重要性です。私の7つのserendipityは、分子生物学、生化学、薬学、病理学、腫瘍学、臨床医学の内外の研究者と免疫学を専攻する私との学際的な共同の産物といえます。

15年ほど前に、こうした交流を広げる番外のserendipityが、名古屋理学部附属臨海実験所長の佐藤英美先生との出会いによって生まれました。佐藤先生はユネスコが委嘱する国際細胞科学研究機構(ICRO)の理事を務められ、昭和56年にICRO国際研究コースを初めて名大で開催されました。この佐藤先生からのご要請で、昭和62年7月に2週間にわたって開催されたICRO国際研修コースのオーガナイザーを務めました。その後、トヨタ財団から支援を受けて、アジア地域

のバイオテクノロジーに関する国際アンケート調査を行うとともに、コース参加者が所属する中国、タイ、インドネシアの中核的な大学・研究機関を訪問し、多くの知人と友人を得ました。この関係で受け入れた留学生との共同で上に紹介したserendipityの幾つかと遭遇することになります。さらに、平成7年に佐藤先生のICROの職を引き継ぎ、ICROの理事長であるProf. Georges Cohen(Pasteur 研究所)をはじめ、生命科学の各分野の研究者と交流する機会に恵まれ、毎年世界の各地で開催される理事会とシンポジウムに出席して、視野を広げることができました。因みに、世界の各地で開催されるICROのコースは、名大では、歴代の総長と全学のご支援により、理学部で2回、医学部で3回、農学部で1回そして最も新しく工学部で1回開催されました。

もう一つの番外のserendipity(??)は、はからずも、平成9年4月から平成11年3月までの2年間医学部長を仰せつかり、そして松尾稔名大総長のもとで平成14年10月から15年3月まで総長特別補佐、平成15年4月から副総長を務めさせて頂いたことです。このこと自身はserendipityといえるものではありませんが、このことによりさまざまな新しい経験をさせて頂くことができました。平成9年4月に名古屋大学医療短期大学部が医学部保健学科となったことに伴う医学部の組織変革、平成10-12年に医学部医学科の大学院重点化が実現しましたがそのための基盤の整備、平成16年4月の名古屋大学の法人化にむけての準備へのかかわりは、この間にあった医学部での不祥事への学部長としての対応とともに、今後ひょっとしたらまた遭遇するかも知れない新たなserendipityが育つ土壌となることを願っております。

さまざまなserendipityを享受できるようご指導を賜った総長をはじめ名古屋大学の多くの教職員と学生諸氏に感謝申し上げますとともに、名古屋大学の法人化後のさらなる発展を祈念致します。

胎児が与えてくれた研究との出会い

水谷 栄彦



私は昭和40年に本学医学部を卒業し、大学院満了後、国立名古屋病院、静岡済生会病院、浜松医科大学(医大病院開設時3年弱)、県西部浜松医療センター、名古屋臨港病院と12年間臨床の最前線で働きました。

私は、大学院の3、4年目の頃から、胎児の心音を聞き(妊婦検診)また7-8回/月の当直で、夜中に多数の赤ちゃんの元気な産声を聞き、次第に妊娠の生理・病態を、以下の様に、考え初めました。

1)胎児は、急速な発育のためや、自らへのストレス(母体を介する)に反応し、多くのペプチドホルモン分泌を増加させる。2)胎盤には、胎児が作るペプチドホルモンを代謝・分解する物質(多くのプロテアーゼ)が存在する。3)胎児が作るペプチドホルモンが、胎盤プロテアーゼによる分解能力を凌駕すれば、ペプチドホルモンが母体側へ流出して、ホルモン作用が母体へ現れる。妊娠の生理・病態の本質とは、胎児ペプチドの母体側へのホルモン作用ではないかと考えたのです。

昭和57年、助手として、名古屋大学産婦人科教室へ戻り臨床(癌の手術やハイリスク妊婦の管理)のかたわら、私は自分の立てた作業仮説を証明しようと考えました。胎児が分泌するペプチドホルモンに、子宮収縮作用をもつオキシトシンや血管収縮作用(血圧上昇)を持つアンジオテンシンの他多数のペプチドがおります。そこで、私の胎盤研究は、オキシトシンを分解するオキシトシナーゼやアンジオテンシンを分解するアンジオテナーゼが中心となり進められました。

これら胎盤のプロテアーゼ研究の中で、思わぬ研究(者)との出会いがありました。私はその後ヒトオキシトシナーゼをクローニングし報告しましたが、其の時同時に米国から、インスリン作用で、細胞質から膜へ移動する蛋白(Insulin Responsive Amino peptidase, IRAP)のクローニングが報告され(ラット)で、両者は同じ蛋白であることが、明らかになり、糖尿病の病因研究と出会いました。我々はオキシトシナーゼの family とし脂肪細胞(Adipocyte)由来 Amino peptidase, ALAP、をクローニングしました。抗原蛋白は、細胞質内顆粒の蛋白分解酵素で修飾される事が知られていましたが、その蛋白分解酵素が、ALAPであることが最近明らかになり、免疫学と

出会いました。

妊娠中毒症の病因の解明を目指して始めた、アンジオテナーゼの研究は、本酵素が妊娠中毒症のみならず、ヒトの血圧維持に関わる大切な酵素である事も明らかになり、高血圧研究と出会いました。

さらに神経ペプチドの Substance P を分解するプロテアーゼと考えられていた、ジペプチル・アミノペプチダゼを胎盤に見出しました。その後本酵素が、インスリン分泌刺激ホルモンを分解するプロテアーゼである事が、ドイツのグループにより明らかにされました。この酵素の阻害剤は糖尿病の治療薬として期待されており、糖尿病の治療薬研究と出会いました。

我々は、本酵素が婦人科癌の浸潤・転移に関与する事を明らかにし、本酵素の癌治療への可能性を明らかにしました。またオキシトシナーゼやアンジオテナーゼも、同様に婦人科癌の増殖・浸潤・転移に関与する事を明らかにしました。

最近の我々の癌研究は、私の胎児発育の仮説が、癌の発育にも拡大され事を示唆するに至りました。すなわち、癌自らを作る数多くのペプチドホルモンが、癌の発育のエネルギーとなり、プロテアーゼはペプチド分解を介して癌増殖を制御している。

すでにプロテアーゼとその阻害剤は治療薬として使用されているものもおりますが、この分野の臨床応用は、無限の可能性が有りそうです。4月から本学経済学部卒業の山本明氏のご理解で、寄付講座「プロテアーゼ臨床応用学」が発足する運びとなりました。本学のプロテアーゼの研究者の方々の本講座への暖かいご理解を伏してお願いする次第です。

本学職員として、学友の皆様のご期待に、沿えない点多々あったとは存知ですが、私のささやかなこれまでの努力が、本学歴史の中に少しでも寄与できたのであれば、これ以上の幸せはありません。なお、私は4月から名古屋駅前(大名古屋ビル)で開業(ダイヤビルレディース)いたします。宜しくお願い申し上げます。

それでは、学友の皆様のご健勝と益々のご発展を祈念しますとともに、今後とも産婦人科教室への暖かいご指導、ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。

稔りの時

村松 喬



人生においては40までに本文を書き、それからは注釈を書く。しかし、注釈がないと本文の意味や味わいが分からない。こんなことをショーペンハウアーが記していた。名大医学部にはほぼ11年間、お世話になった。研究者の活動時期に翻訳しても、注釈を書く期間のほずである。しかし、注釈のほうが本文より長く重大になった。

20世紀の終わりごろは、まさに遺伝子ハンティングの時代だった。私達も、細胞間相互作用の分子的理解を目標に、いくつかの遺伝子を発見していた。しかし、単離した遺伝子の生理的、病理的意義は不明であった。名大に移ってから、遺伝子ノックアウト法を軸に解析を進め、意味づけに成功した。

最も力を入れた対象はミッドカインである。これは私達のグループが1988年に報告したタンパク質であり、成長因子あるいはサイトカインに分類される。ミッドカイン遺伝子ノックアウトマウスを作成して調べると、血管障害時の新生内膜形成、虚血性腎炎、リウマチモデルとなる関節炎そして手術後の癒着がいずれも大きく軽減されていた。ミッドカインは炎症性細胞の移動に重要な役割を果たし、ノックアウトマウスではこれが妨げられているからである。また、アンチセンスオリゴDNAを用いてミッドカインが癌細胞の増殖、浸潤を促進していることも明らかにした。ミッドカインを癌やリウマチなどの難病治療の標的とする可能性が生じたのであり、実用化を目指した研究が進んでいる。ミッドカインの弟分であるプレイオトロフィンを欠くマウスも作った。両遺伝子を共に欠くマウスは生まれ難く、相互に掛け合わせるとほぼ不妊であり、ミッドカインファミリーの発生における重要性も確認された。

免疫グロブリンスーパーファミリーの新しいメンバーとして見出していたベイシジンもノックアウトし、これが精子形成、胚の着床さらに神経機能に重要なことを明らかにした。

眼科の三宅教授との共同で、ノックアウトマウスはほとんど盲目で、やがて網膜変性を起こすことも見出した。この理由も判明した。ベイシジンはモノカルボン酸トランスポーター(MCT)の細胞膜への輸送に関与する。ノックアウトマウスの網膜はMCT欠失のため、乳酸の細胞間移動が出来なくなり、網膜機能が不全となるのである。

糖タンパク質の糖鎖は細胞間識別に関与し、また細胞を区別するマーカーとなる。私達は、この糖鎖の研究を長く続けていたが、機能面の研究が発展したのはやはり名大であった。例えば、リンパ球のリンパ系への帰来の時、標識となる糖構造を合成する酵素をクローニングできた。この酵素遺伝子をノックアウトすると、消化管のリンパ系へのリンパ球帰来がことに顕著に障害された。また、分化によって変化する糖鎖を合成する酵素遺伝子をノックアウトしたところ、行動、リンパ球形成、腎機能などの点で多彩な異常が現れ、この糖鎖の機能を確認できた。ブタの臓器の異種抗原糖鎖を切断するエンドグリコシダーゼのクローニングにも成功した。異種移植への応用が期待される。

名大の研究環境はいろいろな点で優れていた。生化学領域の私達には、共通機器が充実していることがことに重要なファクターである。医学部の機器センターにタンパク質解析のシステムを整備できたのは特にうれしかった。私達のグループではfmolレベルで配列決定できるようになり、研究のスピードが上がった。鶴舞地区の機器センターは今後も十分に機能することが必要であり、支援をお願いしたい。名古屋圏全体で研究者の層が厚く、しかも交流が盛んなことも有り難かった。お世話になりました多くの方々へ御礼申し上げますと共に、名大の研究が自由な雰囲気を保ちつつ、さらに発展していくことをお祈りします。

定年を迎えて 名古屋大学保健学科の6年間

松村 悠子



北海道大学医療技術短期大学から6年前に名大医学部保健学科に移動してきました。当時の名大医療短大部長の国井教授から「はじめまして。緊急なことで申し訳ないが本日中に名大移動を決意してほしい」という電話が平成8年3月19日に入ったのでした。同月21日には文部省へ書類提出だという。たった2日で書類を整理しなければならないという状況の中、まずは承諾し北大の人々にはゆっくり後に話すことにして、ドタバタとファックスで書類を送りました。こちらの事務の方々は徹夜で私の業績などの整理をして、無事に間に合ったということでした。名古屋に移動するということについて、冷静にじっくり人の意見を聞きながら考えたのはその後のことでした。少しの後悔もありませんでした。文化の違うところで仕事をするのは苦労するとやや脅迫めいた言葉を戴きながらも、希望で一杯でした。未知の世界への憧れが強かったのです。平成10年4月、いよいよ名古屋の生活が始まりました。暖かく迎えていただき、新設の看護教育が始まりました。私の目標とする臨床看護を思いっきり教授できることは、私自身が自由で解放的かつ発展的になることを実感しました。短大という枠から大学教育という変化はやはり学問を教えるにふさわしい環境の変化がありました。この環境の変化に答えるために私は「患者満足」というキーワードを主軸にした講義と実習を導入し力を入れてきました。学生(誰でもそうですが)は体験で学ぶことは印象が強く残ります。しかも優秀な学生たちは、体験を理論的に考察できます。知識を教え込むのではなく、自分で学んだ知識を利用し応用できることが重要な教育の鍵になります。そのため実習の位置づけは講義以上の価値を置くことにもなります。大幸キャンパスと鶴舞の名大病院との行き来をし

ながら、学生の充実した表情や混乱・困惑した表情を思い浮かべ、授業内容の適否や実習指導のあり方を模索する日々でした。こうした私の臨床看護の考えや態度は、臨床の看護師の方達にも伝わり、毎年看護部から講演を依頼されるようになりました。そして看護部の卒後教育研修会には私達教育側の教官が参加することとなり、現在活発に双方のコミュニケーションが展開しております。

私自身の研究生活は「重度意識障害のある患者への看護」を主テーマとし、科学研究費により、味覚刺激による脳波への反応をみることができました。結果は味刺激は確実に意識障害患者の脳の活性波を増大させることが判明し、経口的に食事をする(管から注入するのではなく)は、意識の覚醒に大きな貢献をすることにつながることが証明されました。

更に学科・専攻の運営において平成14年度主任を仰せつかり、1年間でしたがその業務に携わることができました。教育・研究の場は、仲間との調和のとれた環境から進歩・発展するものであることを肌で感じる事ができ、貴重な体験をさせていただきました。このように名大の6年間は私の宝物になりました。ありがとうございました。

音声情報処理の研究をふりかえって

板倉文忠



私と名大のつながりは、小学3年生だった1949年にさかのぼる。通っていた田舎の八南小学校(豊川市)の近くに旧海軍工廠の跡地があって、そこに新しく名大空電研究所ができた。その研究所の所員の子供で、とても都会風の子が転入してきた。これがきっかけになり空電研に何度か遊びに行ったり、1952年には6年2組全員で空電研を見学させてもらったこともある。松林に囲まれた広場に、パラソルアンテナがずらっと並んで太陽の方向をこらんでいた。太陽から届く電波を観測して、太陽の活動を詳しく調べているとの事であった。電気工作や機械工作が大好きだった私は、「こんなところで電波の研究できたらすばらしいだろうな」とあこがれていた。また、岡崎高等師範学校(名大教育学部の前身)とその附属中学・高校が自宅のすぐ近くにおり、まいと学校公開があって、おもしろい理科の実験をたくさん展示されていた。

こうした少年時代をすごした後、あこがれの名古屋大学工学部電子工学科にはいり、卒業研究としては岩井研究室(空電研)でホイッスラ空電の分散別計数装置の設計製作をした。ここでは磁気プラズマ中の電波伝搬の理論と不規則信号のアナログ分析・処理の基本を学習した。大学院修士課程では、宇田川-福村研究室で、手書き文字のパターン認識と不整脈心電図の時系列解析の研究と共に、確率過程・応用数学や電磁波解析などの勉強にも力を入れた。当時、同研究室には、1年先輩の稲垣康善さん、鳥脇純一郎さん、同級には阿部圭一君、後藤宗弘君、宮崎保光君がおり、毎日12時間以上の切磋琢磨の大学院生活をすごした。振り返ると、この時期の蓄えが、その後の研究の糧になっていると思う。

博士課程に進学した矢先の1965年5月に指導教官の宇田川先生が急逝され、途方に暮れていたところ、福村先生から、「電電公社電気通信研究所に新たに基礎研究部が発足し、名大先輩の斎藤収三さんが研究室長になって音声情報処理・画像通信の研究を始めるから、それに参加しないか?」とのお話があり、名大での学籍は保持したまま、長期実習生・奨学生の資格で、1966年から、武蔵野研究所で音声情報処理の研究をスタートした。その当時の音声信号処理は古典的なフーリエ解析と回路理論に基づいていたが、これに定常確率過程の考え方を付け加えて、音声の分析、合成、

符号化、認識の新しい理論を構築することができた。

1968年3月に博士課程を満了し、直ちにそのまま電電公社に入社して、音声情報処理の研究を続けた。研究は比較的順調に展開していったが、公私ともに多忙で、学位論文の執筆はたいへん遅れ、学位を授与されたのは、1972年11月である。同年米国ボストン郊外で開催された音声通信に関する国際会議での論文がきっかけになり、ベル研究所に来ないかとの誘いがあった。気持ちは揺れたが電電公社には3年間奨学金を頂いた恩義があるので、勝手に辞めることはできない。そうする内に電電公社とベル研究所間の研究者交流制度を作っていたとき、私が最初のケースとして1973年8月から2年間ベル研に派遣されることになった。ベル研では音声認識の研究を行うとともに、新しい音声分析手法である線スペクトル表現を提案した。これを日本に持ち帰り、優秀な若手の研究者の協力を得て、LSP方式として研究・実用化を進展させた。

40才代になると研究よりむしろマネジメント業務が多くなる事に悩まされていたが、幸い1984年4月に母校に教職をえて、まだ若い学生を相手に、音声・音響情報処理の教育・研究を始めた。はじめの10年余りは助教授、助手はおかず、孤軍奮闘していた。1995年4月にKDD研究所にいた武田一哉さんが助教授として加わってくれ、研究が大いに加速された。特に、1999年度から5年間、「多元音響信号の統合的理解」が文部省中核的研究拠点形成プログラム(COE)に選ばれ、武田一哉さんほか、情報工学専攻の大西昇さん、外山勝彦さん、人間情報学研究科の箕一彦さんにも分担してもらい、名古屋大学に音声・音響の研究拠点が形成できたことはたいへん喜ばしい。また、この研究拠点が21世紀COEプログラム「社会情報基盤のための音声映像の知的統合」として受け継がれ、さらなる発展が進行しており、今後の成果が楽しみである。

最後に、少年時代から大学院修了に至るまで、私を研究者としてよく見守り、また、20年間にわたる研究あるいは教育に思う存分専念させていただいた名古屋大学の関係各位に、さらに、38年あまり惜しみないご協力とご支援を頂いた歴代の共同研究者および学生諸君に、心から感謝する次第である。

美しさに魅せられて

— 宮 彪 彦



まだ修士の学生の時に、故上田良二先生（当時理学部教授）の超微粒子の講演に啓発されて、理学研究科博士課程入学して以来、38年間にわたって、名古屋大学にお世話になったわけである。名古屋に来た当時は、博士課程を修了したら、どこかの企業に就職するつもりであったのが、上田先生の工学部への転出に伴って、先生の研究室の助手に採用されたのは幸運だった。それ以来、35年間にわたって、工学部に居ることになるとはその頃は思いもしなかったが、結局私は名古屋大学と工学部の水にどっぷりと浸かってしまったようである。

超微粒子がやたたくて、名古屋に来た私であったが、先生の「超微粒子は自信が無い」の一言で、それならば、先生の自信のある電子回折と電子顕微鏡について勉強して、基礎体力をつけてから、超微粒子や結晶成長に移行しても遅くは無いだろうと考えて、簡単に電子回折に鞍替えしてしまった。その時与えられたテーマは、「電子線の異常吸収係数の測定」に関するものだった。その頃の私はなぜか「超」とか「異常」という形容詞に弱かったようで、勇んで実験を始めた。この測定は電子顕微鏡像に現れる等厚干渉縞の厚さによる減衰から求めるものであったが、最初のうち、なぜ縞が見えるのか理解できなかった。その頃の私の知識では、縞が出るのは波の行路差によるもので、結晶を通過する電子線に行路差など出るはずが無かったのである。この効果が結晶内に入射した高速電子線がブロッホ波に展開されることによる、結晶中での運動エネルギー状態の異なる波の間の干渉によるものであるという、動力学的回折理論の結果を知って、この理論の美しさにすっかり魅せられてしまった。

そこでこの理論を自由自在に操って、異常吸収係数の測定法を開発した。これはこれでかなりまくいっていたが、丁度その頃、何の気なしに、縞の間隔を測ってみたら、理論値から大きくずれていることに気が付いた。これはその当時、結晶学

で話題になっていた、結晶構造因子の精密測定の一つの方法として、注目され、西ベルリンのフリッツ・ハーバー研究所に遊学することとなった。ここでも、異常吸収係数の研究を行っていたが、次第にこの研究の将来に疑問を抱くようになり、研究分野の変更を模索し始めていた。そんな矢先に、共同研究者から一つの電子回折写真を見せられた。それはとても美しい写真で、私は直ぐに何故そのような美しい形が出るのか、解き明かしたい気持ちになった。その幾何学的な形は直ぐに分かったのであるが、強度分布の美しさは、やはり動力学的理論が必要だった。しかし、その写真は今までとは異なり、結晶表面で反射した電子の回折図形であり、これまで、私が自由自在に操っていた理論ではどうにもならず、新しい理論の構築が必要だった。幸運にも、その方法が直ぐに分かり、帰国してからは、計算機コードの作成と、新しい実験装置の製作に取り掛かり、反射高速電子回折を使った表面物理の研究にのめり込むと同時に、学生時代から気になっていた、結晶成長とナノ構造へと興味はシフトしていった。

そのころ、走査トンネル顕微鏡（STM）が発明され、電子回折で、平均的な構造のみを見ていた私は、成長中の局所的な構造の変化を見るためには、STMが必要だと思っていた。幸運なことに、世の中は原子レベルでの物質制御が話題となり、温度可変のSTMを購入することが出来たのである。ここでも、結晶表面の美しい現象に浸ることが出来た。

結晶表面の研究には電子回折も先、全反射が使える陽電子回折のほうが有力だということを、反射電子回折を始めたときから思っていた。その夢が今年から叶い、反射陽電子回折による表面研究のプロジェクトをはじめることが出来たのも、私にとって長年の恋人をやっと口説き落とせたような嬉しさがある。

これらの研究を進めるに当たっては、多くの方々にご厚情を賜り好きなことに没頭出来たことを心から感謝している。

周期表の旅を終えて

伊藤 健 児



約40年にわたる研究者・教育者としての旅を終えるにあたり、これまで筆者の研究活動を支えて下さった共同研究者と、実験に情熱を傾けてくれた学生諸君の協力にまず感謝したい。筆者の世代は、若手から中堅にかけての研究者として大切な時期を、右肩上がりの日本の成長とともに過ごし、大学改革に追われ研究と教育に集中できなかった最近に若干の悔いは残るものの、全体としては時の運に恵まれた幸せな人生であった。

筆者は有機金属化学を主な研究分野として過ごしてきた。博士課程に進学し故石井義郎先生のもとで、有機ケイ素アミンの研究からこの分野に足を踏み入れて以来、典型元素を経て、有機遷移金属化学に至る今日まで、周期表の旅を楽しむことができた。

研究の軸足を有機遷移金属化学にシフトするきっかけになったのは、有機スズ化学で高名なクラーク先生のもとに留学したさい、白金錯体の合成研究を命じられたことにある。有機金属化学は、日本では有機化学の分野であるが、欧米では無機化学の分野とされていた。工学部で学んだ無機化学は、窯業と電気化学で、錯体化学は理学部の領域であった。早速大学のショップへ走り、当時無機化学の定本とされていた教科書を買込み、実験の傍ら必死で無機化学事始めをして知識を獲得しつつ真空ラインを使う合成実験に明け暮れる毎日を過ごした。遷移元素の魅力に触れた経験は、筆者のかけがえのない財産となり、帰国して有機反応に関連するパラジウムの有機遷移金属化学に取り組んだ。最終的に筆者のライフワークとなったメタラサイクル錯体の合成・構造・触媒機能の研究を、鈴木寛治(現 東工大)平井憲次両博士らと、典型元素で経験したリンドを配位子にした錯体合成を西山さん(現 名大)をはじめ、米国のX線解析の専門家の助けを借りながら成果を挙げることができた。

昭和53年に豊橋技科大が創設され、新構想大学の設立メンバーとして骨を埋める覚悟で赴任した。まさにゼロからの出発であった。西山博士に共同研究者として来て頂き、強力な援軍を得た。研究実験棟が完成して本格的に研究活動ができるようになって、ルテニウムの有機金属化学と触媒機能開発に挑戦した。この元素は、原子価が多様で有機反応の触媒としては当時扱い難いとされていた。有機遷移金属化学の手法を積み重ねて炭素-炭素結合形成機能を示す酸化還元系を探り当てた研究には永島英夫博士(現 九大)らの貢献が大きい。しかし筆者は錯体合成と触媒作用の関連に何か物足りなさを感じていた。モデル錯体としてでなく、何とか触媒として生きている中から、触媒活性を発現できる有機金属錯体を手にしたという願いが通じて、共役ジエンの[4+4]付加環化と選択的直鎖二量化で、その夢を実現できたときの喜びは忘れられない。

そののち思いがけず本学に研究室を預らせていただく機会を得て、有機合成の立場からルテニウム錯体触媒反応を見直すことにした。新進気鋭の山本芳彦博士の協力のもと、二官能性基質のルテニウム触媒による多様な[2+2+2]付加環化を実現するとともに計算により新規な付加環化経路が発見できた。またその成果を昔のパラジウム触媒反応にも反映できた。再び一緒に研究することになった松田 勇博士には、引き続き独創的なロジウム触媒を用いるカルボニル化を進めて頂くことにした。また山本氏は、筆者の経験しなかった有機チタンやジルコニウム反応剤を活用するカップリング反応を編み出して前周期遷移元素にまで筆者の目を広げさせてくれた。

本学には、学生として9年、助手として10年、復帰して9年間お世話になった。その間お世話になった多くの教職員の皆様へ改めて厚く御礼申し上げますとともに、法人化後の名古屋大学がますます発展するよう祈ってやまない。

定年にあたって

岡 本 佳 男



1990年3月に名古屋大学に赴任して14年と1ヶ月経ち定年を迎えました。本学で事故、災害もなく、個人的にはすこぶる健康で過ごせたことを大変ありがたく思っております。この間、陰に陽にご支援くださった名古屋大学の関係者をはじめ大勢の方々に厚くお礼申し上げます。

1964年に大学院に入学してから定年を迎えるまでのちょうど40年間で「高分子化学」研究一筋に過ごしてきました。最後の14年間は本学の工学部においてです。大学に入学した1960年前後は石油化学を中心とした応用化学の発展期であり、いくつかの大学に合成化学科や高分子学科が設置されました。高校生の時から化学には興味をもっておりましたので、大学3年に進学する時に夢がありそうな高分子学科を専攻しました。しかし、学部では高分子と名のつく講義はまったくなく、卒業研究も有機合成の手ほどきを受けるだけでした。いま考えますと、そこで有機合成をしっかりと学んだことが以後の高分子合成の研究を進める上で大変役立つように思います。大学入学時は日米安保闘争で大学は相当混乱しており、博士課程終了前後は大学紛争でまったく研究ができず不本意な時を過ごしましたが、1969年4月に助手に採用された直後に、2年間ミシガン大学に博士研究員として留学する機会に恵まれました。その時行った研究は、以後の私の研究の展開にはかりしれない影響を及ぼすことになりました。

1973年のオイルショックで石油化学を中心とする化学工業は大きなダメージを受け、我が国の高分子の研究にも大きな転機が訪れました。高分子学会の会員も12,000人から8,200人まで激減し、皆の関心も高分子合成、高分子物性を中心としたものからファインな機能性高分子へと変わっていきました。研究を始めて10年余りでこのような大きな変化に出会うとはまったく予想しておらず残念な思いがしたのを記憶しております。そのような時に取り上げた研究

テーマが、院生の時から行っていた高分子合成の研究と留学中に行った研究の接点なる光学異性体モノマーの選択的重合です。野依先生は光学異性体を選択的に合成できる不斉触媒の発見でノーベル賞を受賞されましたが、私は重合反応で光学異性体の一方を選択的に重合しようとした。さまざまな試みの後、1977年に極めて高い選択を行う重合系を発見することができました。正月休みに読んだ、研究とは直接関係がない有機合成の本の中に書かれていたことが発見のヒントになりました。このようなゆとりをもって研究を行うことが、最近の若い人には時間的に不可能になっているように思われてなりません。この発見はその後の研究に決定的な影響を及ぼし、これがヒントになって一方巻きおらせん高分子の不斉合成に成功しました。このらせん高分子は予想外に高い光学異性体の識別能力を有しており、実用化され、さらに名古屋大学でより高性能のらせん高分子の開発に展開することができました。

40年に及ぶ高分子化学の研究歴のなかで、その先行きに不安を覚えたこともありました。しかし、いつの時代も研究の将来を的確に予測することは容易なことではありません。ちなみに高分子学会の会員は、現在は12,000人を越えております。地球上で生物を構成する主要材料は、タンパク質、多糖類、核酸などの精密に構造制御されたキラルな高分子です。一方、われわれが合成できる高分子の構造制御のレベルは天然高分子には遠く及びません。このギャップを埋めることに高分子化学の大きな夢があると思います。若い人がこれに興味をもち名古屋大学で研究が一層盛んになることを願っております。

私の足跡

後藤 繁雄



太平洋戦争の開戦直前の昭和16年2月に愛知県の最北端の山村にある北設楽郡稲武町で産声をあげました。あまりに幼く、戦争の記憶はおぼろげですが、夜に光が外に漏れると名古屋の空襲の後で残りの爆弾を落とすかもしれないと恐れて、電球の笠に黒い布を被せ、その下で震えていたこと、父が庭に掘ってくれた洞穴で遊んだことが思い出されます。小学校の校庭に町民が集まり、大人が全員とも泣き出したのには非常に驚きました。これらは防空壕であったり、終戦の玉音放送であったことを後で知りました。現在でも、人が人を殺し合う戦争やテロが絶えないのは悲しい事です。

中学3年の2月の朝、身体が突然に熱くなり、起き上がれなくなりました。40度近い高熱が続き、体中に発疹ができました。うつろな中にも、このまま死んではいけないと祈り続けました。医者診断で猩紅熱との事で1ヶ月ほど学校を休みました。私の家は中学の校庭の境界にあり、窓から元気に遊ぶ友達の姿を見て、健康の大切さを痛感しました。

病気のために高校受験の時期を逃がし、1年遅れて刈谷高校に入学しました。刈谷には姉が嫁いでおり、そこに寄宿させてもらいました。姉の家では、受験勉強に集中できないとの理由で、3年生の時に1キロほど離れた小屋を借りました。その年の秋に、伊勢湾台風が東海地方を襲いました。夜半になると、風雨が強くなり、小屋が壊れそうで怖くなり、姉の家に帰る事にしました。しかし、既に増水しており、道にも水が溢れ、農業用水路に落ちて流されました。幸い、水路が直角に曲がっており、そこで止まる事が出来、命拾いをしました。眼鏡は無くしてしまい、どのように姉の家にたどりついたか記憶がありません。小屋は壊れずにはありましたが、残しておいた教科書や参考書は水

浸しになっていました。登校すると、古い校舎のためか屋根瓦が散乱しており、その後片付けや海岸近くの浸水した家屋の消毒などに駆り出され、1ヶ月ほど勉強する状態ではありませんでした。しかし、他の受験生もみんな同じ状況だと思い、焦りはありませんでした。

なかば諦めていた名古屋大学に合格できた時の感動も忘れられない記憶です。入学式は新築の豊田講堂で行われ、名大祭もこの年から始まりました。従って、その回数が私の大学での在籍年数となります。また、安保闘争が1年生の時にあり学生ストのため講義もなく、平穩になってから遅くまで補講を受けました。

4年生になると、卒業研究のために工学部化学工学科の森田徳義教授の反応工学研究室に配属させていただきました。その後、2年間の修士課程、3年間の博士課程と大学院に進学しました。博士課程まで進学した理由は、学部3年の夏休みに九州の化学会社で工場実習した時に煙突から赤色、緑色など七色の煙がもくもくと出ており、弁当を食べる机の上には塵が積もっており、公害が問題化される前でありましたが、企業に就職した時に健康が心配であったためです。

昭和44年4月に助手として、プロセスシステム工学研究室の松原正一教授にお世話になり、「反応分離」の研究を始めました。その後、反応工学研究室に戻り定年退官を迎えるまでの35年間、アメリカUCDでスミス教授の基でのポスドクとしての時期を含めて合計44回の外国出張、優秀なスタッフと学生に恵まれ楽しく過ごさせて頂きました。

改めて感謝いたします。

研究領域を変える？、変えない？

小林 猛



これまで、研究領域を4回変えてきた。この経験から感じたことを書いて、現役の研究者のご参考にしたい。

最初は、反応工学という領域に興味を抱き、4年生と修士課程の学生時代に勉強した。多くの化学反応があるので、化学反応を工業的に設計する反応工学は様々な反応装置に対する合理的な知識が要求される。この点に興味を抱いた。今年2月にオウム真理教の教祖、麻原に対する一審の判決が言い渡された。このことに関連して感じたことであるが、反応工学を理解した研究者がオウム真理教の信者にいなくて、不幸中の幸いだったと思った。何故なら、信者の中に有機化学者はいたので、少量のサリンは合成された。しかし、上九一色村の教団内のサリン製造用反応装置は完成しておらず、かなり未完成品であった、とのことである。反応工学を理解した研究者がいて、大規模なサリン製造用反応装置が完成していたら、どのような大災難が発生していただろうか。東京の連続地下鉄サリン事件だけでも多くの被害者が出たのであるから、ぞっとすると同時に、反応工学の重要性もよく理解できる。

修士課程2年生の時、指導教授であった齋藤弘太郎教授がガンで死亡したため、博士課程では指導教授を変えざるを得ず、研究領域もガス吸収に変わった。昭和30年代後半には公害問題がクローズアップされ、四日市市近傍の近鉄に乗車していると、イヤな臭いがしたもので、ガス吸収の研究は公害防止という観点からも重要であった。博士課程の学生時代と助手時代には、恩田格三郎教授のご指導により、ガス吸収の研究に邁進した。助手時代（昭和43年頃）には、公害防止技術としてのガス吸収の学問体系は完成しかけていないと感じ、その後の研究テーマをどのようにすべきか、大いに悩んだ。

鈴鹿工業高等専門学校に助教として昭和45年に勤務場所が変わり、新しい研究領域を研究する気持ちになった。当時は工学部ではほとんど研究されていなかった

生物工学分野である。現在ではバイオ分野は工学部でもよく認識された分野であるが、当時は一般的には清酒醸造くらいしか認識されていなかった。誰も教えてくれないので、独学するしかなかった。昭和48年に名大農学部の助教授にしてもらえ、生物工学を自分の専門とする研究領域とする気持ちが固まった。昭和56年に名大工学部に戻り、さらに生物工学の研究を深めていった。幸いにも、松尾稔工学部長（現総長）の肝いりで生物機能工学科が平成3年に新設され、生物工学の研究に邁進した。これらの研究を通して、微生物や動物細胞を利用する日本のバイオ産業に少しは貢献できたと思う。

昭和から平成に変わった頃から、日本の高齢化社会の問題点がよく指摘されるようになってきた。私もこの問題に何らかの貢献をしたいと思うようになってきた。その結果、平成5年頃から、医用工学の研究テーマを増やしていった。ここ5年くらいは医用工学の研究ばかりとなってきた。磁性ナノ微粒子を用いたガンの温熱免疫療法の開発研究と、DNAチップ情報を利用した疾病の診断技術の開発研究である。幸いにも、前者のテーマに対して、厚生労働省に申請業務をするためのベンチャー企業を今年1月に立ち上げることもできた。

社会情勢は急速に変化しているので、研究領域もどんどん変えるべきなのであろうか。それとも、その根底にある普遍的な真理を一貫して研究すべきなのであろうか。大学ではこの両方の取り組みが必要なのであろう。私の場合には明らかに前者だった。今後は独立行政法人化して、積極的に外部資金を導入することが求められるようになるから、前者の研究者が相対的に比重が大きくなるのであろうか。また、それは大学にとって良いことなのであろうか。

長年お世話になった名大のますますの発展をお祈りします。

名大を去るにあたり

鈴木 正之



35年間御世話になった名大を去るにあたり自由闊達な雰囲気の中で仕事を続けてくることができた職場を懐かしく思い出しています。しかしながら、現在、大学が直面している諸問題、あるいはこの国が進んで行こうとしている方向に目を向けると感傷にひたってはかりいることはできません。

「学問研究は、ときの権力や特殊利益の圧力によって曲げられてはならない。社会との協力が平和に寄与するものとなるために、われわれは、研究の自主性を尊重し、学問研究をその内的必然性にもとづいておこなう。」これは1987年2月に全構成員の名において制定された名古屋大学平和憲章の一部分を抜書きしたものです。この憲章は大学の使命を高々と掲げた大変格調の高いもので、このような理念をもつ大学で働く事で誇らしい気持ちになったものです。この憲章に署名した者の一人として昨今の国の政策や大学をめぐる情勢は大変気がかりなものです。

最近、いろいろなところで感じるのですが、世の中全体に合理性や論理性を追求するというよりも感覚的に物事を判断するという風潮が幅を利かせているのではないのでしょうか。とくにバブル経済以降、合理性よりも利潤を追い求めるという風潮が世の中を支配してきました。さらにバブル崩壊後はすべてにおいて効率化ということが金科玉条となり、市場原理の導入による活性化が声高に叫ばれております。企業や行政組織の中には効率化が合理性をもつ場合があるのは当然ですが大学の研究や教育となると話が違います。

現在、大学改革の名のもとに国立大学の法人化が進められております。しかしながらこの改革は、大学のあるべき姿の議論から生まれたものものではなく、行政改革および経済戦略の一環として政府主導で進められてきたことが問題です。システムの改革というもの

は、そのシステムが時代とともに不具合を生じたときに原因を究明し、反省の上になんて改善を行なっていくという歴史的な努力の積み重ねによって初めて実り多いものとなるのではないのでしょうか。

そもそも、国立大学の研究設備の貧弱さや施設の老朽化が大きな問題になっていたのはついこの間のことだったのではなかったでしょうか。我が国の高等教育経費の対GNP比がアメリカやドイツの半分程度で研究費が少なすぎるということ、定員削減によって行政職員に極端な多忙化が進んでいること、国立大学としては高すぎる授業料と貧弱な奨学金制度のため教育基本法にうたわれている教育の機会均等が空文化していること、さらには、学生の学力低下と基礎教育のありかた等、改善すべき多くの問題を放置して、大学に市場原理を導入することによって活性化をはかろうというのは、まったくの愚行で国の将来を危うくするものだとは私と考えております。

最近、青色ダイオードの発明者に200億円を会社側から支払うようにとの判決が下されました。これは研究者にとっては快挙であり、青少年にとっても夢はスポーツ選手になることだけではないという話で素晴らしいニュースでした。しかしながら、この発明の背景には、量子光学を初めとする膨大な基礎研究の成果が横たわっていることはまったく報道されません。直接は商品開発に結びつかない基礎科学研究、さらには市場と無関係であるが、より人類にとって本質的だと考えられる哲学や文学といった人文科学研究をおこなうことが国立大学の大事な使命のひとつだと思えます。

今後、名古屋大学が文化の担い手として、ヒューマニズムの立場に立ち、真に人類のための大学としていっそう、名声を高められますよう学外よりお祈り致します。

定年時に思うこと

高橋 勝六



分離技術の歴史は古く、その代表格である蒸留技術は錬金術としてアラビアで始まり、十字軍によってヨーロッパに技術移転され、今日でも高級ウイスキーの伝統的製造技法として工学の関与を排除して使われている。卒業研究としてこの蒸留に取り組んで以来41年、分離技術の発展をめざして分離工学の研究に携わってきた。当時は高度成長期の真只中、装置工学として化学工学はもてはやされ、その中で研究を始めた団塊の世代である。

名大には1966年に博士課程に入学し、引き続き蒸留の研究を行った。このころ全国の大学で学園紛争がエスカレートした背景には何があったのだろうか。私見では世の中が豊かになったおかげで生活の糧を得ることに厳しさがなくなり、生物の基本目標である生きることが目標にならなくなったのではと思われる。明確な目標をもてない若者が付和雷同したように感じる。その後の2度にわたる石油ショックで世の中が厳しくなると雲散霧消した。同じころ私の研究環境も厳しくなり、研究の喜びを目標にしないと自分自身を説得できない状況になった。それは周囲に影響されない目標が明確になったという点で大変幸せであったと思う。当時、新たな分離技術と注目されていたテーマに取り組み、何とか実用化したいと試行錯誤した。始めてみると直に重大な問題点にぶつかり、根幹に関する問題なので克服するより避けて通ることにした。いろいろ工夫して分離が達成でき設計のための解析もできたが、分離エネルギーのロスの問題が残った。このテーマを扱う多くの論文では省エネルギー的という言葉が枕詞のように使われているが、この方法の特徴に根ざしたエネルギーロスなのでどうしようもない。実用化という初期の目標は達成できず空しさも感じたが、悪戦苦

闘する中で多くのことを学ぶことができ以後の研究の助けになったこと、必ずしもうまくいかないから研究をしたのだと自らを慰めている。その後は既存の分離技術における壁を破り新たな操作法を開発し、分離装置設計法の確立のための解析を行い、いくつかの分離技術の進展を図ることができたと自己満足している。技術は思いつきによるところが大きい。思いつきを実行し、科学の法則を使って解析して新たな思いつきを呼び起こす。これを繰り返してスパイラルアップしていくのが工学と理解している。新たな思いつきがいともうまくいくとは限らない。いくつかの無駄の中からうまくいくときがあり、喜びは無駄の分だけ大きくなる。無駄を無駄と思う必要はなく、無駄を通して洞察力が養われ、センスある思いつきが可能になり無駄は少なくなっていく。

最近わが分子化学工学教室ではJABEE(日本技術者教育認定制度)による教育プログラム認定に取り組んだ。そこで求められた教育目標の具体性とは、目標の達成度が評価できるもので、学生が理解できると同時にこの目標が社会に対する学生の品質保証契約だから明解でなくてはならないという重要なことである。また教官の教育貢献度評価を求められ、評価基準をと思ったが、評価基準による教育の偏向が懸念される。教育観は十人十色、多様な教育観があることが望ましい。数人の評価委員に各人の教育観に基づいてお願いし総合評価した。この認定制度がめざすものは教育プログラムのスパイラルアップであり、それは我々の取組みの原点でもある。教育改善に向けて継続的な取組みが必須である。

名古屋大学での23年間

田 邊 忠 顯



昭和56年4月に電力中央研究所から名古屋大学に移ってきて、23年間がたちまち過ぎてしまった。その間無我夢中であったような気もするし、そんなに頑張っていなかったような気もする。しかし、確実に言えることは学問の進歩もさることながら、この間に自分自身として随分と大きな心境的变化があったということである。風のそよぎや、木の葉の色様の変化にも心が動かされ自分の中で何かが反応しており、その反応の度合いが一層激しくなっているような気がするのである。年を取った所為も在ろうが、青年期以上に生命（いのち）とか本質的なものへの激しい思いがあるのは確かである。大学の中の環境も随分と変わったのであるが、自分の内的な変化に比べるとそれはどうでも良いことのように感じられる。

外の世界は重要であるが、内的な世界に比べればそれはどうでも良いという感じなのである。これは外に対しては実に無責任と言えれば無責任なのであって、本当にそうなのであろう。強いて自己弁護をするとすれば、そう言う外的な仕事を一生懸命やったと自認できる人達が本当の意味で責任ある対応をしてきたかどうかということでもある。というのは、我が国の現在の有様、価値観の喪失、モラルの喪失（指導者と見なされている人達においても）の原因は、実はあまりに目の前のことばかりに気を取られて対処療法に偏りすぎたためではないのか。激しく揺れ動く現実から少し離れて、自己の本質をじっくり探究しないでいて、国のありようについても教育の在りようについても本質的で正しい選択は不可能であることは確かなのである。

大学に来てみて本当に良かったと思われるのは、こ

のような心的な傾向を有するどちらかと言えば社会に迎合しない個人をも包容して自分の思うところを行わせ、その人間を許して一人前の人間として存在させている所に在ろう。そして、退官と言うことで、自分が生み出した学者の卵、大学に勤めることになった若い弟子や、博士の学生の大勢に取り囲まれて見ると、これこそは先生冥利と感ぜざるを得ない。実に何というか暖かいお湯のようなしかも高級なお湯の中に居る感じなのである。

自分の学問の事を言えば、阪神大震災でRC構造物が崩壊してみたり、その後新幹線トンネルのコンクリート塊が落下事故を起こしたりで、今までの自信が学会単位で吹っ飛んでしまい忸怩たるところがある。申し訳無いが後輩の諸君に頑張ってもらわないと仕方がない。

私は、第2の人生を今まで以上に存在の根元に触れる努力を払いたい、そして大自然の懐に本当にゆっくりと自分を没したいと強く念願している。そして、同時に我が国の基本が、大学の基本がそのようなことに目が向けられることを念願している。

ルックエイジア - 国際貢献から国際連携へ -

架 谷 昌 信



民族・国家・地域から見ると、技術は恒にかれらの専属であり、彼ら自身のものである。しかし、一方で技術は恒に移転・拡散する。詳しい調査をするまでもなくこれは人類史上の厳然たる事実である。技術個々の歴史を辿れば、移転の経路が複雑で時には消滅するものもある。しかし、重要な技術は、形を変え、多くの枝葉を伸ばし、分裂して新しいものを生み出しつつ、移転・拡散し続ける。

ところで、人類史上過去少なくとも3度は極めて大規模な技術移転が起こり、人類史に甚大な影響をもたらしたと考えられる。近々の事例はアラブ・イスラム圏から西ヨーロッパ地域への移転であり、これは12・13世紀から始まり、オスマントルコ帝国の滅亡で一応の終焉を見た。そして、現在4番目の大規模移転が西ヨーロッパ・北米地域から日本を含むアジア地域へと起こりつつある。否、正確には起こりつつあると考えるべきである。始まりは19世紀中葉、移転はまだ完結してはいない。

技術は移転するが、単に移転するだけでは、人類社会に大きな影響を与え得ない。過去、技術移転はいたる所で起こり、現在も起こり続けているがただそれだけのことである。移転された技術が、それ自身を母体としつつも新たに革新され、その革新が継続的に行われ、枝葉を伸ばし、分化し、新しいものを生み出す状況が構築された時、初めて技術が移転したと言うべきである。従って、技術移転にはそれに継続するビジネスモデルの構築、ビジネスモデルを支えるソフト及びハードの社会インフラの整備が不可欠である。当然、事柄は政治・経済のシステムから文化・文明の本質へと迫る。そして、最も重要なことは、移転を受ける民族・国家・地域にそれを受容するエネルギー・ポテン

シャルが潜在していることが必須ということである。アラブ・イスラム圏から西ヨーロッパ地域へ大規模な技術移転が何故起こり、その結果世界に何が惹き起こされたか、このことに思いをいたせば事柄は一層明白になる。

アジアは中国、インドを包含する膨大な地域である。しかもそこに住む人々は永い歴史の変遷の中で幾多の過酷な試練を受けて今日尚悠然として健在である。いわばへこたれない、したたかな、膨大にしてかつ活力に富む人々の住む潜在エネルギー集積地域である。日本は19世紀末、アジア主要国に遅れて技術移転を受け入れ、逆にそれに一早く反応して今日を迎えている。現在、日本が永々と蓄積されたわが国民のエネルギー・ポテンシャルを使い果たしたか否かは微妙な問題であるが、状況は17・18世紀の西ヨーロッパに酷似しているようにも思える。スペイン・ポルトガル・オランダの道すじを辿る可能性も危惧される。しかし、問題はアジア地域全体である。

21世紀がどのような時代になるのか。百論はあれど、勿論それに収束を迎える気配は未だない。人類史をマクロにながめれば、このような時、技術移転とそれを大規模受容し得るエネルギー・ポテンシャルを有する地域から収束解が生まれてくる可能性は高い。アジア地域がそのような地域となり得るのか。異論はあるが、否定は勿論できない。

大学がいかに自己認識を持とうとそれは自由である。しかし、大学は明らかに人類史の一翼を担う社会の重要な一機関であることは明白であり、大学の可能性も限界もその中にある。ルックエイジアで何を申し上げたいかは賢察頂けると思う。永年にわたりお世話になりました。

名古屋大学を去るにあたって

服部 忠



名古屋大学には、入学以来45年間、助手就任からでも36年間の長きにわたってお世話になりました。3年生までは、こんなに長くお世話になるとは思いもよみませんでした。卒業研究が大きな転機になりました。化学工学科から独立し合成科学科に研究室を構えたばかりの斉藤先生の下で卒業研究をさせていただきましたが、設立されたばかりの研究室で、スタッフが居ない上に、先輩とはかけはなれた新しいテーマであったため、自分自身の意志と責任で、ほとんどすべてのことを運ばねばならないという状況が幸いしました。実験設備が何もなかったため、自分自身で考えて(大げさに言えば、設計して)作っていかねばならなかったことも良い経験でしたが、卒業研究の途中で先生からいただいたテーマから離れてパルス反応法の理論的解析の研究を勝手にはじめたことはさらに大きな経験でした。この研究は、修士課程での主なテーマとなり、やがて学位論文の核へと発展しましたが、当時の化学工学の新たな流れである移動現象論の方法をいち早く取り入れたものとして注目を集めたと自負しています。国際誌の査読者からパイオニアと褒めていただいたことも記憶に残っています。このような研究ができたのも、斉藤先生の寛容さと上述のような状況の故に獲得できた自由のためものと感謝しています。

博士課程進学時に、物質に密着した化学の研究、特に理論的・物理化学的な研究をしたいという願望をもって化学工学科から応用化学科に転向しましたが、一方では、化学工学出身という背景を活かしたユニークな研究をしたいという一見矛盾した願望も持っていました。後者に関しては、その10数年後に2つの研究で願望を叶えることができました。1つ目は、拡散反射赤外分光法による触媒表面反応速度の測定法の開発と一酸化炭素水素化反応への応用の一連の研究で、触媒表面上での非定常反応を赤外分光法で追跡して、表面反応の速度定数を計算する方法を確立しました。卒業研究以来のパルス反応法の化学工学的解析を背景に、触媒反応速度論を一步前進させた

ものです。もう一つは、ほぼ同時期に愛知工業大学の鬼頭教授と共同で着手した触媒設計支援エキスパートシステムの開発です。助手に就任して新しい研究テーマを探していた頃、国際触媒会議で発表されたDowden博士の論文に触発され、コンピュータで触媒設計をやってみようと考えたことがあります。当時の上司である内田教授に化学と触媒の勉強が先だと諭されて断念しましたが、鬼頭先生という共同研究者を得て10数年後に実現することができました。この研究は、その後のニューラルネットワークの応用への展開とあわせて、文字通り化学工学の背景を活かした世界初のユニークな研究をすることができたと思っています。

一方、化学的な研究をしてみたいという願望に関しては、学位取得後に数年間の苦闘の後に私なりの応用化学的研究の基盤を固めることができましたし、ゼオライト細孔径制御のような新しいアイデアを考案するなど、一応のレベルに達したとの自信を持ちましたが、私の研究を展開するには足りませんでした。私なりに納得の行く研究ができたのは、教授就任後でした。スタッフと学生諸君のおかげで、原子レベルの構造活性相関とその場合分光法による機構論的検討を柱に、種々の固体触媒反応という複雑な系を対象として従来の触媒化学より物理化学的に一步踏み込んだ研究を展開することができました。ただし、これで終わりではおぼれません。化学的な深みと化学工学的な思想をもったユニークな研究をしたいという30数年前の夢に、物理化学的な触媒研究とコンピュータによる触媒設計支援との統合という形で最後のチャレンジをしてみたい、その入り口にでも立ってみたいと思っています。幸い、雑用から解放され、ゆっくと時が流れる中で、思索にふけることができるのではないかと楽しみにしています。

最後になりましたが、名古屋大学の一層の発展を祈念し、お世話になった多くの方々にお礼申し上げて、退官の言葉とさせていただきます。

材料研究の面白味が漸く分かりかけて・・・

宮原 一 哉



表題のようなタイトルで平成16年3月3日(水)に最終講義をさせて頂きました。『このようなタイトルを掲げると、“お前は材料の教官として、何十年も研究をしながら、材料の研究がそんなに嫌だったのか？”と思われるといけないので』と言いながら、先端技術共同研究センターの渡辺久土先生の特許セミナーでのお話を紹介しました。渡辺先生が示された表から、『戦前の10大発明のうち、半分は高峰譲吉のアドレナリンをはじめとして、物質・材料に関するものである。また最近の特許件数の多い日本の大学教官の10名のうち、7名の発明は物質・材料に関するものである』ことを教えられました。5位、6位にそれぞれ野依先生、赤崎先生の特許件数があり、10位が東大の藤嶋先生の光触媒関連です。私は不明にして、発明活動でこれほど物質や材料の分野が有力であることを知りませんでした。これらの先生方を始め他の上位の先生方の物質・材料の発明にはいかにもインパクトがあります。私は40歳代から最近まで、核融合炉構造材料の照射損傷の研究と発電プラント用耐熱材料の高温強度と微細組織に関する研究に主眼をおいて研究をし、若い頃からそれなりに一生懸命仕事をしていましたが、研究生活も終わり近くなると、やはり『現象の解明だけでなく、人間生活や工業技術の発展に直接寄与し、“ が開発した ”と言われる程のインパクトのある材料を開発していなければならなかったなあ』と反省する気持ちが強くなっております。しかし、核融合炉第一壁構造材料や発電プラント用耐熱材料の開発は、大学の小規模の研究室での仕事としてはもともと不可能なことから、若くして“材料開発”研究への意識が強く持てない限り、上記のように私が“反省・後悔すること”は必然の流れであったと思われまます。ただ、極く最近

では、学振の『未来開拓研究推進事業・高減衰能材料開発研究』に参画し、Fe-Cr-Mn-Co系合金で、従来にない高強度の高減衰能材料(略称:HIDAS)を開発でき、産業界からも多少の反響が得られ、材料開発研究の楽しさを味わっています。また、環境保全の点から、電気製品において鉛フリーはんだ合金の使用の重要性が指摘されていますが、このはんだ合金の種々の強度特性に関し、材料研究者のかかわりがまだ少ないように感じられます。私は企業と連携し主要な鉛フリーはんだ合金の強度のデータベースを整備し、それを通して新合金の開発を目指していますが、これも不思議と心楽しい研究になっています。

大学の研究らしく、あまり大規模でなく、フレッシュな研究をきめ細かく深く追求し、且つ、実際に人間生活や工業技術の発展に役立つ材料の開発をする楽しみが『材料研究の面白味』であろうと思います。上記の野依先生、赤崎先生や藤嶋先生のご研究には及びもつきませんが、私も多少なりとも材料研究の面白味が分かるようになった気がします。これからも、もうしばらくは庭いじりの楽しみよりは『材料研究の面白味』を味わう方を優先させようと考えています。

最後になりましたが、工学研究科の方々を始め多くの皆様に、永い間大変お世話になり、誠にありがとうございました。心よりお礼申し上げます。また、皆様のご健勝と今後の益々のご発展をお祈り申し上げます。

すべては良い講義をするために Professor must solve everything

毛利 佳年雄



私は、昭和38年に九州大学工学部電子工学科を第1回生として卒業し、大学院修士・博士課程を経て5年間同電子工学科の助手を務めた後、14.5年間を九州工業大学電気工学科で講師、助教授、教授として務め、本学で16.5年間を教授として務めました。したがって、36年間を3つの国立大学の教官(21年間を教授)として過ごしたことになります。九州工業大学の最後の5年間は、我が国初の情報工学部の創設室教授として奔走し、飯塚市に設置された同学部に勤務することが決まっていた時期に名古屋大学工学部電気系教室から招かれ、天の時を得た心境で最も若い旧制大学に赴任しました。経常研究費は5倍になり驚きました。

本学での教授の仕事の一環として、前任の大学での経験もあり、情報処理教育センター長5年間、「米国主要大学の工学教育におけるコンピュータ利用状況調査」団長での成果を基礎に工学部、情報文化学部、言語文化部の連携で設立された情報メディア教育センターの初代センター長2年間の計7年間を、情報教育改革に傾注しました。センターの規模は国立大学で最大です。この仕事の流れはまだ続き、退官前2年間は教養教育院の基盤科学部門長として、基礎セミナー、健康科学分野とともに全学教育の情報化および情報メディア教育の改革に務めました。

研究面では、本学の自由な雰囲気の中で楽しく独創性を発揮することができました。1993年にはアモルファス磁性ワイヤにおいて外部印加磁界に応答する高感度の電磁気現象を発見して「磁気インピーダンス効果」と命名し、高感度マイクロ磁気センサの新原理を提唱しました。これは欧米を中心に世界的に研究が広がり、1995年には米国電気電子連合学会(IEEE)からフェローの表彰を受けています。この研究は立ち上げから科学技術振興事業団(JST; 現機構)の支援を受け、1997年にはCMOSセンサ電子回路を発明しハイテクコンソーシアムを経て、1999年から愛知製鋼がJSTの委託で開

発に成功し、2003年には集積回路センサ(MIIC)へと発展して電子コンパスとして携帯電話に搭載されるようになりました。

このように、研究は1つの間にかいよゆる産学官連携で急速に発展し、2000年にはアイチマイクロインテリジェント(株)という研究開発型会社(ベンチャー企業)が愛知製鋼の子会社として創設され、私は役員(取締役)を兼業しています。本学初だそうです。産学官連携は創造的な人と人との出会いであり、実に楽しいものです。私は、60歳の還暦を機に、斬新な研究「磁気・水分子プロトニクス」を立ち上げました。京都大学大学院医学研究科のガン医療専門の福島教授との共同研究による極めて趣味的な仮説理論ですが、既にアムステルダムやボストンでの講演は反響が大きく、優秀なレフェリーにも恵まれてIEEEの論文誌に2編掲載されています。この理論の応用として、研究室では成長度が2倍早い金魚の集団が泳ぎ回っており、息子からはマッドサイエンティストの称号をもらっています。

名古屋大学工学研究科教授の16年半のこれらの諸活動は、すべて良い講義をするためのものであったと言えます。大学教授と旧制大学教授は、一流の講義をすべきであるというのが私の信念であります。毎週100名近い大学院生および200名近い学部学生を相手に、教壇から既製理論の誕生の時代的背景と構造の意義と応用展開を臨場感をもって語り、良い刺激を与えて魅きつける講義ができることは教授たるものの最高の幸せであり、研究室での大学院生の育成とともに、教授の多様な活動の原動力になっています。この一環として、私はいろいろな高等学校に出掛け、本学の案内と研究の紹介に努めています。

長い間、大変お世話になりました。厚く厚くお礼申し上げます。

この4月からは、JSTの常勤プログラム主管として研究費行政官の仕事を行います。

退官にあたって

安田 仁彦



名古屋大学を卒業後、引き続き名古屋大学に教官として採用いただいた。教官として36年もの長い間お世話になった。この間楽しく過ごさせていただいたのは、多くの方のご支援のたまものと、心から感謝申し上げる。

教官としての36年間で大きな変化があったのは、電子機械工学科が創設されたときである。いまから21年前、私が機械学科で助教授をしていたときである。

当時産業界で「メカトロニクス」が注目されるようになっていた。ただしメカトロニクスという用語は、いまでこそ世界に通用するが、当時は一部に通用する和製英語で、むしろ「機電一体」の方をよく聞いた。この用語は、高機能の機械を作るため、機械と電気を一体化することを意味し、まさしく今日のメカトロニクスである。これを工学として体系化し発展させることが電子機械工学科の創設の目的であった。機械工学科から2講座、電気工学科から1講座を振り替え、新設講座を要求するという内容で、電子機械工学科が計画された。機械工学と電子工学の融合を目的とし、近年重要とされている境界領域のはしりの学科であった。

設置の見込みが立ったとき、新学科に移るようこと指導教授から言い渡された。それまで機械学科にいて、電子工学にまったく関心を払わずにいた自分にとって、晴天の霹靂であり困惑した。大蔵省の内示で設置が認められなかったという噂が聞こえてほっとしたら、すぐその後復活折衝で設置が認められたとの話があって内心がっかりしたことを思い出す。

新学科へ移ってからは、悩む暇はなかった。にわか仕込みで電気電子やコンピュータを勉強し、電子機械学科に専任となった教官、それと協力関係にあった機械学科、電気学科の若い教官を交えて、新学科のカリキュラム内容や学生実験のテーマについて熱い議論を交わした。

実験立ち上げでは、多くの若い教官の協力を仰ぎながら、自分自身も、機械学科にいたとき経験しなかった分野のCAD実験を担当した。数か月にわたって、深夜まで、プログラム作りに没頭した思い出がある。おかげでコンピュータをよく理解した。

講義として、CAD/CAMという慣れない科目を担当することになった。当時大企業では、CAD/CAMの導入が盛んに検討されていたが、教科書が出版されるほどに確立した技術ではなかった。参考になる教科書なしで、雑誌の解説記事や論文を読んで、冷や汗をかきながら講義したことを思い出す。それでも数年間講義を続けると、何となく筋立てができてくる。これをもとに、後年、この分野の著書を2冊も出すことになるとは想像できなかった。

研究面でも範囲を広げる必要があった。当時企業では、設計のツールとしてモード解析が興隆期にあり関心と呼んでいた。自分のこれまでの研究とこれとを結びつけた研究テーマに活路を見出した。この分野のテーマで工学博士が何人か育っていったのは、われながらよくやったと喝采したい。

電子機械工学科ができたことで苦労したが、いま振り返ると、すべてがなつかしい。教育の幅がひろがった。研究の幅も広がった。苦労を補って余りある、いい経験をさせていただいたと、いまでは感謝の気持ちでいっぱいである。

電子機械工学科が創設されて21年、人間でいえば、成人式を過ぎたところである。電子機械工学科を卒業した教官が、いま専攻で中核的な役割を果たしている。創設の当初から身を置いてきた電子機械工学専攻に、私は限らない愛着を感じる。来年度から、電子機械工学専攻は、私のふるさと機械工学専攻と一緒に機械理工学専攻になる。この専攻の発展と、それを通して名古屋大学の発展を祈念してやまない。

大学を去るに当たって大学に期待するもの

安田 幸夫



私の研究歴は、東芝中央研究所（後に総合研究所に改名）に14年間、豊橋技術科学大学工学部電気・電子工学系に7年間、そして名古屋大学工学研究科結晶材料工学専攻に18年間であった。名古屋大学在任の18年間における社会の理念、概念、機能、インフラ構造および生活様式の変化は著しいものであった。この変化は、主にIT関連機器の進歩、物質的豊かさおよび平和の長期継続によるものである。しかし、変化の全てが必ずしも良い方向には向かっていない。

これからの世界、日本そして大学を考える時、今までより激しい変化を加速度的にもたらすであろう。これを日本レベルで考える時、日本社会は必然的に本質的変革をもたらさなければならない。なぜならば、日本は政治、経済、産業、科学技術等あらゆる分野において、初めて世界のトップに出つゝあるかまたは出なければならない立場にあるからである。今までは工業製品の輸出によって、経済的有意性において世界のトップレベルであったにすぎず、お手本となる先進国がいつも存在しており、常に見習いつゝ発展して来たのである。今後は、全てにおいてお手本がなく日本独自の判断によって発展の道を開拓してゆかなければならない。例えば科学技術分野でいえば、研究・開発プロジェクトの成功率が今までの100%近いものから10%以下になることである。

このような社会変革に対して、我々が概念的に目指すものは、農耕的社会から狩猟的社会への変革である。すなわち、“和を以って貴しとなす”農耕社会の消極性から、獲物を追う狩猟社会の積極性への変革である。日本の全分野、全領域において、既にこの変革をすべき時期に達している。しかし、行政機構、銀行などの日本の中核機構において、これらの変革に戸惑っている。そこで大学が重要な役割を果たすべきである。元来大学の誕生理念、歴史をみると、大学の役割は社会に先駆けて改革・社会の進展をリードすることであり、実行することであった。現在もその役割は変わってい

ないが、大学はこの役割を十分果たしていない。

一方、科学技術の分野においては、狩猟的なものが出つゝある。ノーベル賞の候補が多くあることは、既にトップレベルに出つゝあることを示している。欧州から日本へ来たあるサッカーの監督は、日本のサッカーが強くなるためには創造力と想像力が必要であると言っていた。サッカーは真に狩猟民族のスポーツである。刻一刻と変化する状況の中で、想像力と創造力によって球（獲物）を追い込んでゆくスポーツである。科学技術もこの概念と通じるものがあり、狩猟的センスと思考が重要である。今後の日本を担う学生をみると、上記能力を持っていると喜んでいる。研究室に入った頃は一般的に消極的で受身であるが、修士課程を修了する頃には、基礎学力や研究における自主性において大きく成長して巣立ってゆく。これをみると、若者の消極性・受身の姿勢は、暗記教育、悪平等教育、いじめ、経済的豊かさ、過保護など、社会の要因による面が大きい。元来日本人はアグレッシブな面を持っていることは、戦国時代や明治維新の人物像をみても理解できよう。

大学を去るに当たって心配している1つは、大学の重要な役割の1つである基礎科学の衰退への懸念である。この理由は、(1)教養部の廃止に伴う基礎分野の教官席の減少、(2)将来の研究を荷負う助手席の減少および(3)実利を求める競争的プロジェクトの横行、である。(1)(2)に対しては、将来の学問の担い手の減少、と同時に専門家による教育の衰退を意味する。我々の反省は、教養部廃止に伴って、潜在していた良い面も失ったことである。大学の独立法人化に向けた変革に対して、潜在している良い面を十分に認識し、無くさない様にしてほしい。

前半に述べた狩猟的アグレッシブな理念と研究、および最後に述べた基礎学問の維持・発展は、大学の本質的役割として両者の追求を今後の大学に期待するものである。

大学に思う

木村志郎



昭和34年4月に名古屋大学に入学して以来、1年半企業に勤めた時を除き、43年間と9月間にわたる長期間を名古屋大学で過ごしました。今までの人生の2/3以上にあたります。滝子での教養部の後、農学部林学科の学部学生として安城にあった木造2階建ての校舎に名古屋から通いました。当時は学生数が少なく、教官と学生との連帯感は強く、和気藹藹の中で勉学することが出来ました。学部には専用の野球場、テニスコート、バレーコートがあり、講義や実験の合間を見て先生や技官の人達と一緒にスポーツに興じました。学科対抗の球技大会や運動会もよく行われ、終わった後は、必ず飲み会が行われました。大学で飲む機会が非常に多かった気がします。飲んだ後、そのまま先生の家に押しかけたことも何度もあります。学科の壁がなく、研究室で飲み会をやっている時、窓ガラスから人影を見ると、他学科の人であるとかまわず部屋に呼び込み一緒に飲み仲間に入れるのが常でした。その頃の先生と今の教官とを比べると、その頃の先生のほうが人間的に一枚も二枚も上だったような気がします。大学が増え教官数が増えれば、必然的に教官の質は下がります。政治家の不祥事や会社ぐるみの不祥事を知るたびに、大学の教育に問題があるのではないかと思います。研究業績第一主義で人間性が欠如している教官が少なからずいます。大学において研究業績を上げることは義務であり責任です。学生達に「研究のいろは」を教えることは非常に大切なことです。しかし、大学卒業後、リーダーになることを期待されている学生達が人間性に欠けているとすると、明るい社会は見えてきません。例えば、同じルールでも、自分達にとって有利な時はそのルールを肯定、不利な時は否定する年配教官がいて、それを支持する若い教官が少ない。自分達が少数派である時には多数決には問題があるといい、自分達が多数派を占める時には多数決で押

し切る。論理の矛盾を平気です。倫理は時代時代によって変わるから倫理観は当てに出来ないと言っている教官もいる。大学改革をみても、真に望む改組であったならば、短期間の内に、あちらこちらの大学で次から次へと再改組は行われなかったはずである。真に望んだ改組ではなく、単に文部省(現文部科学省)から資金援助と待遇改善を引き出すためのものであったからに他ならない。そのような教官に学んだ学生が社会に出ても、社会を良くはしない。政治家は政治家でテロに関しては資金援助しているものもテロと同じだと決めつけながら、後方支援(復興支援とは別)は武力行為ではないと説明する。テロに関すると同じ論理であれば、後方支援は武力行為と同じだと認めなければならない。その上で、武力行為と同じであるが、後方支援することを国民に理解して貰う必要がある。まやかしの説明で理解を得ようとしてはならない。大学の教官が教官なら、政治家も政治家である。私は父から「志郎、自分が損していると感じている時は、誰にも迷惑をかけていないから大丈夫だが、得をしていると感じた時は誰かに迷惑を掛けていないかよく注意しなさい」と良く言われて育ちました。私は父より進化し、「得もしたくないが損もしたくない」と考えています。学部での試験で、自分の採点より先点数が多過ぎ、教授に「そんなに点は多く取れていない筈」と申し出ました。教授は「不合格者を出さないように、試験の点数の自乗根を10倍し、それに下駄を履かせている。だから、君はその点だ。点が多いと文句言ってきた学生は君が初めてだ」と言われました。私が父から学んだような教育が大学において必要です。そのためにはカリキュラムとか研究設備とかではなく、教官の質を高めることが大学にとって一番大切なことと思います。

退官にあたって思うこと

安田 征市



毎年この時期に定年退官される先生方の記念講演やことばに接してきましたが、ついに私が皆様にお礼を述べる機会がめぐってきました。北大から名大に異動して今年で27年になります。36年間慣れ親しんだ大陸でのんびりした北海道での生活から、梅雨と気温の高さもさることながら目まぐるしく動き回るような忙しそうな生活への移行に日本の気象や風土の広さを感じたものです。3年を経過しますと、夏の暑さや続く残暑にも慣れ、また名古屋の位置も現在そこに居を構えていることが実感できるようになりました。

大学院(理学研究科)では有機化学を専攻しましたが、教官として農学部勤務するようになってから木材化学を専門分野としました。木材や樹木についての専門知識は全くありませんでしたので、林産学科の助手に採用して下さった先生方に今でも深く感謝しております。所属した林産製造学研究室の院生や学生の実験をみながら、空き時間は専ら木材化学の勉強に費やしました。指導教官付の学生実験では紙の抄紙に感激したことを覚えています。研究室の教授が退官された後、しばらくの間隣の木材化学研究室内の教授が兼任されました。木材化学を専門とするからにはリグニン研究は不可欠であることを知った時期でもありましたので、リグニン研究の大家が兼任教授になったことは隣の研究室への気兼ねもなくリグニン研究をスタートさせる契機になりました。最初の実験は圧縮あて材リグニンの化学構造に関する研究で、リグニンの基本骨格であるフェニルプロパン単位がどのような化学結合で重合しているかを明らかにするために、プロリグニンを水素化分解しその生成物から結合様式を知る内容でした。その後、名古屋大学に移ってからは各種リグニンの構造や反応性、機能性物質への変換などについて研究を行い、今日に至っております。

木材はセルロース、ヘミセルロースおよびリグニンからなる細胞壁で作られています。巨木の根本の細胞は自重や風力による重圧を支えていますので、有機材料による究極の構造体は細胞壁の構造がモデルになると思っています。一方、地球温暖化防止と有限な化石資源の保存の観点から、持続的生産の可能な木質系バイオマスに大きな期待が寄せられています。バイオマスエネルギーが新エネルギーとして認可された結果、製紙工場から木材から化学パルプを製造する際に生じる廃液(黒液)の発電もバイオマス発電として認知されました。木質系バイオマスのエネルギー化技術には種々の方法がありますが、生物化学的変換が構成高分子物質の化学構造を保持しつつ低分子化し利用することに特徴があります。日本では直接燃焼によるバイオマス発電が進んでいますが、木質バイオマスの石油資源代替としての役割を加味しますと、生物化学的変換技術が有望と思います。その中の酸加水分解法はセルロース・ヘミセルロースの多糖成分を単糖とし、さらに発酵によりエタノールにかえ液体燃料あるいは有機工業原料として利用する方法です。硫酸加水分解では原料の約30%を占めるリグニンが不活性残渣(硫酸リグニン)として得られますが、幸いにも少量の硫酸触媒によるフェノール化で溶解性と反応性を高度に付与することができ、さらに現在リグニン製品として多量に使われているリグノスルホン酸よりも優れた分散性と粘結性をもつ界面活性剤や各種イオン交換樹脂、製紙用ロジンサイズ定着剤、新規界面活性剤に変換可能です。従って、硫酸加水分解法は木質系バイオマス成分の化学構造を生かした利用法であり、今後の発展と実用化を期待している次第です。

名古屋大学では長い間大変お世話になりましたことを心からお礼申し上げますとともに、法人化を契機として益々発展されますことを祈念いたしております。

発生異常研究40年

若 杉 昇



昭和34年に入学して以来、英国に2回留学した期間3年を差し引いた42年を名古屋大学で過ごしたことになります。農学部、畜産学科の学生として入学し、教養部で動物学の講義を受講しているうちに、発生学に興味を持ち将来は発生学領域の研究に従事出来ればとの漠然とした希望をもっていました。

学部及び大学院では家畜育種学研究室に所属し、DDKマウスの不妊現象に取り組みました。DDK系統雄×他系統雌の交配は正常な繁殖力を示すのに対し、DDK雌×他系統雄の交配は殆んど不妊である特殊な現象を追究し、この不妊は受精後の初期発生の過程で胚が胚盤胞形成不全を示して死亡するためであることを明らかにし、更に、この胚死亡は卵子の細胞質要因と精子要因との不適合に起因すること、並びにこれら二つの要因は常染色体性の同一座位の遺伝子によって支配されていることを解明し、この研究は私の博士論文となりました。この研究成果が英国の科学雑誌に発表された後、この問題を更に追究したいのでDDKマウスを譲渡して欲しいとの依頼があり、ロンドン大学、パスツール研究所及び米国ウイスター研究所に送りました。パスツールグループの研究が最も進み、私が予想しました遺伝子座は第11染色体の中央に位置すること及び卵子細胞質要因はRNAであることが解明されました。更に人工的に正常遺伝子を破壊したノックアウトマウスにおいて同様の現象が見られることが示されましたが、不適合に関する分子生物学的解明には至ってなく、その解析は現在進行中です。

私の研究は別の方向に進みまして、卵子細胞質要因の生産を左右する変更遺伝子が存在し、加えて、アレリックイクスクルージョン（対立遺伝子表現の片側排除）の機構が卵子細胞質要因の生産に作用しており、

ヘテロ型雌においては正常要因のみをもった卵子と異常要因のみをもった卵子の2種類が生産されるとの新たな仮説を提唱しました。また、DDK系統と日本産野生マウスから育成したMOM系統との間に不適合は存在しないことが明らかになり、新たな問題が出現してきました。このようにDDK現象は分子生物学的に難しい問題を提起しておりますが、私は問題提起をした段階で退官することになってしまいました。

その他、マウスについては無尾及び短尾形質、小型精巣形質などに関する発生学的・遺伝学的解析を行うと共に、凍結胚によるマウス系統の保存法を検討し、この研究成果は遺伝資源の保存に活用されています。また、ニホンウズラの実験動物化に関する研究を行うと共に肝臓形成異常、耳口異常、網膜形成異常などについて発生学的・遺伝学的解析を行う過程で、ウズラ胚を卵殻外に取り出して操作し、更に孵化の段階まで発生させる方法を確立しました。この方法は鳥類のバイオテクノロジーを支える基本技術として広く活用されています。以上、私の発生学分野の研究の概略を述べました。その他、マウスの神経疾患及び腎臓異常の疾患モデル系統を育成し医学分野にも貢献致しました。

1960年代後半から1970年前半代に架けての大学紛争により大学が変化したかにみえましたが、実際の大学改革は四年一貫教育への移行であったと思われます。その頃に私は教授に昇進し、農学部を代表し四年一貫教育計画委員会委員及び全学共通教育レビュー委員会専門委員を務めました。その後大学院重点化があり、更に本年4月からは独立行政法人に移行し、大きな改革が実施されようとしています。変革の嵐の中を通り抜け名古屋大学が一層輝く世界有数の大学として発展することを祈願して退官のことばとさせていただきます。

定年と『ロシア・・・年代記』

中 條 直 樹



京都大学文学研究科言語学専攻への進学が決まり、大学時代の恩師のお一人にご報告に伺った。恩師は研究会を主催しておられ、それに参加するように声を掛けて頂いたのが、「年代記」との付き合いの始まりであった。博士課程（後期課程）を2年で中途退学するまで、京都大学教養部（現総合人間学部）の露語研究室で、或いは恩師のご自宅で「年代記」を読むことを教わった。浅学な若輩者を暖かく迎えて頂き感激したことを憶えている。思えば、「私塾」的性格の研究会であった。

縁あって本学の教養部に赴任したのが昭和47年、その後、教養部改革にともない語学センター、総合言語センター、言語文化部と最後には国際開発研究科へと所属を変えながらも、その多くを外国語教育（ロシア語）に従事してきた。この間、上述の「研究会」での活動は人の入れ替わりはあったものの、京都大を中心とした、主に関西在住の研究者を結集して継続的に行われ、『過ぎし年月の物語』（または『原初年代記』ともいう）の訳読を終えたのを契機に、江湖に問おうということなり、訳文の再検討から、注記事項の選定まで、研究会を挙げて取り組むことになった。丁度この頃、「ワードプロセッサ」（T社）専用機が登場し、早速使用させて頂いた。現在の国際言語文化研究科棟の事務室に設置された巨大な「ワープロ」機は、通常の事務機ほどの幅があり、FDは8インチ（256KB）であった。それをご存知なければ現在のUSBメモリーの大容量と比べられたい。この「ワープロ」に向かい、まさに盆も正月もなく事務室に入り込み、打ち込みをした。勝手気儘を許された事務の方々に心より御礼申し上げたい。暫くしてPCを購入し作業効率は飛躍的に向上したものの、「ワープロ」のデータをPC用に変

換するために予期せぬ出費があったのも懐かしい思い出である。お陰で名古屋大学出版会から『ロシア原初年代記』として表題も少しく改めて上梓できたのは望外の喜びであった。名古屋大学出版会の皆様にも改めて御礼を申し上げたい。定年を迎えて向後も研究会活動は継続するが、表題の『ロシア・・・年代記』の「・・・」の箇所に入字が入った研究成果をお届けしたいと考えている。

1991年に国際開発研究科（GSID）が本学で最初の独立研究科として設置されたが、その後順次、前期・後期課程を有する国際開発専攻、国際協力専攻、国際コミュニケーション専攻が整備された。GSIDでは、国際コミュニケーション専攻主任、国際開発研究科研究科長の重責を仰せつかった。この間、研究科棟の新築とその増築が印象深い。特にGSIDがスタート時点では、二階建のプレハブ棟であったことを思えば、新棟完成までの多くの先生方のご協力と本部事務局の後押しに衷心より御礼申し上げたい。

GSIDの10年は特に短く感じた。これは充実していたことの証左であり、また忙しく立ち働いていたこの時期は終生記憶に残ることと思う。

32年間の在職中、諸先輩、同僚の先生方、学生、そして院生諸君に恵まれたこと、また事務の方々に親切にして頂いたことを感謝している。最後に、国際開発研究科、いや名古屋大学の益々の発展を祈念する次第である。

夢を追いましょう

山田 幹郎 (耕士)



教養部生のころ、フランス語の授業で習ったドーデの「最後の授業」は、敗戦後の占領下のためピンと緊張感がみなぎっておりました。その授業風景は、のんびりとした性格の私にあって、時折、もう一つの場面につながってきました。それは、第二次大戦の名古屋空襲のさなか、家財道具を取りに防空壕を出ていく母の背後から見た一面の炎です。その炎という私のいわば原風景は今もほうふつとしてよみがえってきます。常在戦場ということが忘れられないゆえんなのかもしれません。

濃尾平野のど真ん中で生まれ育ち、名古屋大学には学生と教官合わせて45年の永きにわたり置かせていただけたのは、一部は自分の運・鈍・根にあるにしても、大部分は大学の皆さんのお蔭だと感謝しております。既に大学におられない方々を含め数え切れない多くの教官や事務の方々、特に学生諸君の中に、どっぴりとつかり、気がついたら定年です。そのつど、自分なりにがんばってきたつもりですが、自己評価が甘すぎることは自覚しております。至らなかった(多くの、また、気がつかぬままたり過ぎた)ことはご海容ください。

さて、私が本学に入学して、阿部次郎の『三太郎の日記』を読み解くのにこずっていたころ伊勢湾台風に遭い、傾いた自宅のことは親任せにして、学友たちと港区や南区へ救護に行きました。泥水につかり木くぎが腐っているたんすをなんとか小型トラックに載せて上飯田まで同乗、当時教養部のあった滝子キャンパス(現名古屋市立大学)に戻って宿直用の風呂に入り、差入れの新しい下着に替えて帰宅したこともありましたが、あの台風のもたらした弱い人間という現実には悲慘の限りでした。しかし、その後の復興をかいまみ、現在の風景に接すると、人間はすごいな—と思います。

台風のせいで前期試験の方はレポートに変わり、年改

まると60年安保といった騒々しい情勢のもと、地道な基礎学力を身につけるどころではないという感じが多分にありました。そのため、翻訳で読んだシェイクスピアの『リア王』から人間という小さい哀れな存在がしっかりと持っている大きい、まぶしいばかりの魂に圧倒されながら、基礎的な英語力が不足し学部の授業が大変でした。もっと基礎に徹底的に忠実にしないと自分は結局ダメになると思いつめ、英語の先生になる夢を先送りし、自活を続けることにしました。幸いなことにアルバイトにも恵まれました。ただ、バイト先の父親の前に出ると、こちらは2歳にして父を亡くしている引け目からか、どうしてよいのか分かりませんでした。この当惑は、相当長く続きました。

こうして学部学生時代のことを断片的に思い出すだけでも、それはなんとなく老いの繰り言に聞こえます。タイトルとほど遠いようです。ただ、私自身は、今後とも自分の夢を追いつけていきたいと思っております。この1月、名古屋大学最後の英語の授業で受講生の皆さんに小テストに加え参考までにそれぞれが懐く夢を書いてもらいました。幸せな家庭人から、たくましい政治家、あるいは新薬開発によるノーベル賞受賞者となる夢。色々な苦労や孤独の中から確実に夢を追おうとしている皆さんに拍手します。(大学院の人たちへ期待するところも、もちろん、大です。)まだ決めていない人もいますが、ナニあわてるにはおよびませぬぞ。それに、夢の実現は早かったり、遅かったり、ではありませんか。そして、その夢を追う中で人生は夢ということをしつくり考えることになれば、私たちは時の支配に一矢報いるどころか、それを圧倒することになるかもしれません。

皆さん、夢を追いましょう。炎の中に慈雨を見つけましよう。

名古屋大学のみなさん ありがとうございます

平井 勝利



名古屋大学には27年半お世話になった。「石橋をたたいて渡る」ではなく、「石橋をたたいても渡らない」この地の気質にはずっと不満を抱き続けていた。

しかし、名古屋大学の学風は進取の気風に溢れ、とても居心地が良かった。

後半の15年は部局の組織改革に大きくかかわった。

思えば、平成元年経理部主計課に三顧の礼を尽くして文部省交渉をしぶしぶ許可していただいたのが始まりである。平成2年2月14日、4回目の交渉で、「言語文化研究科」の設置が大筋認められた。将来計画委員長として胸がおどった。これに伴い、文部省の「センターに大学院はなしまじい」との意向を受け、省令変更により平成2年4月より、総合言語センターを言語文化部に改組することとなった。

しかし、当時本学では文系の研究所、センター構想(学長を委員長とし、文系4学部長が委員)が永年の懸案であり、平成3年の概算では「環太平洋研究センター」を要求することになっていた。

ところが、2日後の2月16日、本省よりODAを背景とする研究科構想がもちかけられ、急遽それに切り替えることとなり、弱小部局の構想は断念させられた。

新研究科構想委員会(委員長は藤瀬経済学部長)では、「総合言語センター」の設置計画案が本省で好評を得ているので、新研究科設置計画案はこれになぞらえて作成することにします。との発言にジダンダを踏んだことが忘れられない。

さまざまな経緯があって、言語文化研究科案で立てた国際コミュニケーション専攻がそのままのつくりで第三専攻に加わることとなったが、それが良かったかどうかはまだ大きな疑問である。

その後、文学部の大講座化と大学院重点化に際し、文部省の意向を受けて文学部より組織統合の話が持ちかけられた。将来計画委員長としてこの話は何とかまとめたという思いが強かった。文学部では一本釣りを考え既に十数名の教官に個別に声がかかっていたが、それだけは拒否した。文学部の考えや意図もできるだけ勘案しながら、なおこちらの思いも主張しつつ合意に達し、構想案を教授会に諮って文学部に提出した。文学部教授会では、「ひしを貸して母屋をとられる」との意見が強かったらしく、結局学部レベルの統合も、研究科レベルの統合も二度にわたって「無かったことしてくれ」で終わった。

平成8年4月、言語文化部独自の将来構想を実現すべく言語文化部長に選出された。

4月早々より30頁にわたる構想案を持って本部主計課長折衝を始めたが、言語文化部に研究科などあり得ないとの思

いがありおと見られ逃げまわられた。それでもしつこく追いかけて何度も足を運んだ。

主計課に入るとみなさんが、うさん臭そうな顔をした。知っている人は私の顔を見るなり下を向いた。あの時の雰囲気は今でも脳裏に鮮明に焼き付いている。

平成8年7月1日に福島局長が就任された。福島局長にはずいぶん助けていただいた。すばやく文部省交渉が実現したのみならず、10月の第1回目より都合4回いずれも局長自らご同行いただき、2回目の冒頭には、文部省に対して「平成10年度概算の重点項目だ」とまでおっしゃっていただいた。私はそれを聞いて身震いがした。嬉しかった。加藤総長には、学内対応も好意的に、円滑に進めていただき、平成10年4月国際言語文化研究科が誕生した。部局内では平成9年6月の臨時教授会で、基幹講座、協力講座、科目担当それぞれの配置について提案した。本来は、怪文書も飛びかねない問題であるが、ものの10分で合意が得られた。言語文化部教官の後押しと協力には感動した。

平成14年3月、私は階段から落ちて第三腰椎を圧迫骨折し、床に伏せていた。

松尾総長より「教養教育院長をやれ」との電話を受けた。「部局では教務委員長はおろか教務委員もやったことはあはせん。研究科の整備に専念させて下さい。」と申し上げたが、「研究科の整備は平成15年度の重点項目とするからやれ」とおっしゃり断れなかった。

平成15年4月、研究科の整備は実現していたとき、言語文化部は廃止された。

教養教育院の全学参加の実現は容易ではなかった。しかし、本学の教官の教育に対する情熱がその実現の大きな支えであったことは確かである。

定年前の8年間、私は学内の多くの方々のご支援とご協力を得て、多くの改革を実現させていただいた。私は「いい星の下に生まれている」と実感している。学内でも部局内でも必要な時に必要な人が然るべき力を貸して下さい。

私は2年半前に最愛の次男を32歳で亡くした。日を追うごとに弱っていく息子を見るのはまさに地獄である。大学では何事も無かったように振る舞っていたが、私は発狂寸前の状態であった。

しかし、私に力を貸して下さった多くの方々の顔を思い浮かべると私は狂うことができなかった。この方々が私を救って下さったのである。

名古屋大学のみなさん、ありがとうございます。

平野丸の輝かしい航行を祈りつつ 欄筆。

混迷の中で

水谷 泰弘



小学校ではまずひらがなを教えるという、新しい教育システムを最初に体験した世代である。以来20世紀の後半を生きてきて、私にとって最大の出来事は、なんとと言っても東欧諸国の崩壊である。ベルリンの壁の開放直前、東ドイツ市民たちがハンガリー経由で西側に流れ始めたとき、ソ連の介入がないことを願ったが、それは分断国家の悲劇が終わってほしいとの気持ちからだった。雪崩をうつように社会主義国家が崩壊した後になってみると、ある種の喪失感と解放感という相矛盾する感覚にとらわれた。

戦後の日本で多くの知識人たちが、精神的よりどこを求めて、社会主義や共産主義にさまざまな思いを託した。そこには社会の不正に対する怒りと、理想の社会を論ずる情熱があったと思う。労働運動も盛んであった。反米軍基地闘争も新聞をにぎわした。しかしわが身を振り返ってみると、社会主義を資本主義の対抗軸とみなし、社会主義国に関心を持ち、心情的に与することで、現実政治に対する不満のはけ口として心のバランスを保ってきたというのが実情である。ソ連を筆頭とする社会主義国の存在が日本の未来において、かつてのような暴走をくいとめる、いい意味での歯止めになることを願っていた。

東ドイツについて言えば、その後秘密警察や密告制度といった旧悪が続々と暴かれてきたが、社会主義の理想はすべて幻想にすぎなかったと切って捨てる気持ちにはなれない。社会主義が今流行らないのは確かなようだ。社会主義など時代遅れだという人もいるが、ひるがえって今、どのような理想社会を思い描くことができるだろうか。

話は変わるが、幕末近い天保年間の江戸に寺門静軒という浪人儒者がいた。彼の著作に五篇からなる漢文

戯作『江戸繁昌記』がある。それを漢字かな交じり文に書き改めたものを、ここ6、7年院生の皆さんと読んできた。天命の公正を信じ、それに基づいて構築された世界像などというものが信じられなくなった時代にあつて、静軒は、天命の不可思議については、年月をかけて学ばばあるいは分かるようになるかもしれないが、それまではわかる範囲内の道理に従おう、と自分自身を無理に納得させる。もはや世界像を構築することなどは放棄して、個々の現実の問題に対処していく常識の世界である。勿論静軒は自分をも他人をも納得させることのできる明快な論理を欲したであろう。だがそれは無い。その状況において江戸の盛り場や名所の繁昌ぶりを、許容肯定して描く。かつて放埒な青春時代を送ってきた町ゆえに、諦念をも感じさせる眼差しは概して優しい。しかし時としていらいだち、「腐儒」という言葉で腐敗した儒者たちを、揶揄、罵倒する。だが自分自身を戯画化する心の余裕もあり、豊かな漢学の知識を駆使して至るところに散りばめられた聖賢の書のパロディや茶化しは、この書を読むに値するものになっている。静軒が73才で没したのは江戸城明け渡しの20日ほど前であった。

神なき時代などとは言うまい。もともと私には神など無かったのだから。今競争原理という妖怪が徘徊しているが、それを人生の指針にするのは、ちょっと寂しい。とはいえ、はなはだ格好悪いことだが、物を考えるようになって以来、世界とは何か、人間とは何か、また文学とは何かということについて、自分なりの答えさえ見出しえないままに定年まで来てしまった、というのが実感である。

みなさまのお幸せをお祈り申し上げます。

名古屋大学での日々

佐々木 教 祐



1959年、化学が好きという単純な動機で名古屋大学理学部に入學以来、45年の長きにわたって名大にお世話になった。1年次の9月にあの伊勢湾台風に襲われ、八校時代から使っているという古い木造の校舎が傾き休校に、2年次の60年安保も毎日がデモで休校状態が続いたが、それらを通じてクラスの友達との懐かしい思い出もできた。卒業研究は天然物有機化学の平田義正先生のところでさせて頂き、1965年文部技官として採用され、その後助手にして頂き、天然有機化合物の構造研究に入っていった。1964年に京都で開かれた国際学会で、いままで構造解明の難しかったふぐ毒の構造について平田教授グループを含めた3グループが同時にその構造を発表した。そして、3グループがX線結晶構造解析によって解かれた誘導体の構造を基にしていたことに驚かされ、これからはX線結晶構造解析の時代だとの思いを強く持った。その後解析技術を学び、大型計算機センターを利用して10種類以上の新規の構造を持つ植物成分の構造を決定した。

1974年、イギリスのサセックス大学の研究員として膵臓ホルモンであるグルカゴンの構造研究に携わった。「タンパク質 X線結晶構造解析」分野は、1960年代に誕生した若い分野であった。タンパク質の機能はその立体構造によって決まり、その立体構造はX線結晶構造解析に依らなければ決まらない。帰国後、坂部博士らと共にインスリン、アクチンの研究に進むことになった。

1980年に医療技術短期大学部に移り、学生の情報教育の強化に取り組むとともに医学系の先生方とおつきあいさせて頂いた。この時期は16ビットパソコンが初めて発売されるなど、コンピュータ時代の前兆が現れた時でもあった。研究で培ったコンピュータについての知識を活用し、放射線医の協力を得て、人体のアイントーブ画像、CT画像、新しく開発されたMRI画像の教材を作り、学生の実習に活

用した。また、情報処理教育センターが設立されると、学生をバスで連れて行ってコンピュータとは何ができて、どのように使うものなのかを教えた。その教え子が就職して、その病院に新しくコンピュータが導入された時、古くからいる看護婦さんが手を出さないで困っている時、その教え子が使ってくれて助かった、との話を聞いたのも懐かしい思い出となった。その後、学内LANに続いてメールサーバの導入など医療技術の基礎としてコンピュータは役立つことを認めてもらった。

1997年医療短大の4年制化に伴い、情報文化学部および人間情報学研究科に移りました。人間情報学という名前は私が専門としている人間をタンパク質という機能物質を通して考えるという分野によく合っていると感じたからでした。高エネルギー物理学研究所の坂部教授夫妻との共同研究に加えて、大学院生も研究に加わり、より幅の広い研究ができるようになりました。2001年4月からは、研究室の場所は同じで所属が環境学研究科に変わりました。研究も環境浄化に役立つ酵素の構造解明に向けようと思っている内に定年になってしまいました。

学生時代から45年の長きにわたり、名古屋大学で学び、教え、研究する機会を与えられ、多くの優れた先輩や仲間にも恵まれ、また若い学生諸君に接することができた幸せを心より感謝しております。大学を取り巻く環境が如何に変わっても名古屋大学の自由闊達な気風は今後も続いていくことを願っています。お世話になった多くの方々から心からお礼を申し上げますと共に、法人化を契機に名古屋大学が今後益々発展されることをお祈りします。

定年退官にあたって

田中政志



昭和41年名古屋大学理学部化学科に助手として赴任して以来、約38年間名古屋大学の東山キャンパスの中を転々と移動しながらお世話になり、このたび無事定年退官を迎えることになりました。ここに名古屋大学在職中に多くの方々に公私共にお世話になったことを心から御礼申し上げます。

新設された化学科の固体化学講座を担当されることになった恩師田仲二郎教授が昭和40年東京大学から赴任されて間もなく、先生から助手のお誘いをお受けしたのは昭和40年も暮れの12月20日前後であったと思います。当時名古屋には何の縁もゆかりもなかった私に、指導教授の長倉三郎先生から「田仲先生が君を欲しいといってる」とのお話を伺い、「えっ、私が」とためらいの気持ちがありましたが、「できれば将来研究職に就きたい」と願っていた矢先でもあり、「よろしくお願ひします」とお答えした時には、その名古屋大学に、その後40年近くも在職することになるうとは夢にも思いませんでした。

赴任後は「有機結晶の光学的研究」をテーマとして、本来分子の持つ個体としての性質と分子が集合体を形成したとき新しく加わる性質の相違を吸収スペクトルの測定を通して研究してきました。その後、全くの絶縁体ではない異なる有機分子同士の混合体からなる結晶が電気伝導体となる可能性を探求することとなりました。研究測定方法もコンピューターの進歩とともに反射法による解析方法の開発をおこなってきました。そして、昭和53年から一年間文部省在外研究員として、ペンシルバニア大学 Heeger 教授のもとで、「ポリアセチレンの伝導性と可視吸収スペクトルの関係」について研究を行ってきました。後に、彼はこの研究によって白川教授とともにノーベル化学賞を受賞することになります。当時既に名声を得ていた Heeger 教授ではありませんが、彼の研究施設は貧弱で日本の大学の

方がまだ上等と感じるほどでしたから、創造的研究はいつの時代になっても指導者の能力が大いに反映されると感じました。当時日本はバブルの時代で研究も財力でカバーしようとする風潮が主流でしたから、現在の大学で法人化問題が生じる根はずでこの頃からあったと思います。

昭和57年(満41歳)に教養部に異動の時は、ペン大のこともあり研究費についてはあまり深刻に考えずに受諾しました。それまでは田仲二郎先生の工面された研究費を何ら意識せず使うだけでしたから、今度は逆に校費の少なさに研究意欲が無くなる思いを感じたほどでした。そして大学院生の存在を痛感しました。平成5年情報文化学部、平成6年人間情報学研究科に異動し、研究費・大学院生となんとかそろってきました。これによって、不満ながらも研究生活を取り戻すことができましたと思います。平成13年環境学研究科への異動は情報文化学部在籍し化学を専攻する者が、これからの社会に貢献するには情報と環境のどちらを選んだほうが良いかという問題だったと思います。これは今後残された人たちによって解決されることを願っています。

1941年(昭和16年)に誕生し、昭和41年名古屋大学に就職、満41歳で教養部に異動、以来研究生活(大学院修士も含む)足掛け41年で定年退職と私の人生の変換点には常に「41」という数字がついて回りました。これを「今後の私の余生は老兵は死なず(42でない)、良い(41)余生を送るのみ」と私は自己解釈しています。そして、私の人生は「敗戦(太平洋戦争)に始まり、社会の復興をへて敗戦(大学法人化)に終わる過程」を体験してきました。これは恐竜の進化と絶滅の過程と似ていると思いました。余生は「新たな名古屋大学が哺乳動物へと進化し、復興する」のを祈り見守っていきたくと思います。

コンクリートとともに40年

谷川 恭雄



私の専門は、建築の中で最も地味な分野であるコンクリート工学であり、コンクリートと付き合っ40年以上にもなる。かと言って、最初からコンクリートが好きだった訳ではない。建築学科の多くの学生がそうであるように、私も建築学科に入学した当初は、当然設計をやるものと思っていた。ところが、設計課題の講評を受けるたびに、考え方が少しずつ変わっていった。当然のことながら、デザインの世界には正解がない。多くの建築学科の学生は、いわゆる理系で正解がある世界が好きで人間が多い。デザインは感性の世界であり、戸惑いを隠せないうちに4年生になり、所属研究室を決める時期がやってきた。最初に戻るが、別にコンクリートが好きだった訳ではないが、私の恩師である本学名誉教授の故小阪義夫先生のお人柄に惹かれたのがコンクリート研究室に入った理由である。

卒業研究では、テーマとそれに関連するたった1編の論文を与えられただけで、あとはすべて自分で考えてやるようにとのことであった。実験機器の設計・試作に始まり、コンクリートの試し練り、試験体の製作、載荷実験とほとんどすべて1人でやったが、これが実に楽しく、コンクリートの世界にのめり込むきっかけとなった。当時、所属研究室は膨大な量の委託実験を引き受けており、大学院進学後は、修士論文のための実験よりも多くの委託実験を担当した。また、研究室の大学院生は私1人であったため、多くの卒論生の指導を任された。休日が全くない極めて充実した大学院時代であった。

大学院修了後は、前述の小阪教授の言われるがままに、名古屋大学の助手になった。名古屋大学建築学科は創設されたばかりであり、当初は実験施設の整備に追われたが、卒論生が配属されるようになってからは、

実験に明け暮れていた。実験施設も次第に整い、これからという時期に、いわゆる大学紛争が我が大学にも波及してきた。コンクリートのテストピースは左翼系学生の格好の武器として多くの大学で実験室から略奪された。私の研究室でも狙われそうになったが、必死の思いで阻止した。あの紛争は一体何だったのかと今でもあまり思い出したくない出来事として記憶に残っている。

その後、学位論文の作成に取りかかったが、これが私の人生にとって最大の試練の時期であった。睡眠時間2～3時間という時期が半年近く続いた。この機会に叱咤激励して一人前の研究者として育ててやろうという先生の思いやりであったと信じているが、確かに研究者として自立していく自信がこの時にできたように思う。学位取得後は、暗雲が吹き飛んだ思いで、次々と新しいテーマに挑戦し、心技体とも最も充実した楽しい時期であった。

その後、1981年に三重大学建築学科の創設に加わり、9年間を津市で過ごした後、名大に戻り、今日を迎えることになった。大学生活の大半を研究環境に恵まれた名古屋大学で研究と教育に携われたことを大変幸せに思っている。

出来の悪い子供ほどかわいいというのが、コンクリートはまさしく出来の悪い材料であり、愛情(情熱)を持って付き合っていくうちに、次第に離れられなくなるという不思議な材料でもある。今後も何らかの形でコンクリートと付き合っていくことになると思うが、少しずつでも出来のよい材料と言われるように育って欲しいと願っている。

私の学修・研究・教育の場であった名古屋大学

伊藤正之



大学は、学生の学修の場であるとともに、教官の研究・教育の場である。私は、この3つの場全てを名古屋大学から与えられたことに先ず感謝しなければならない。昭和34年4月、私の18歳の春、言い知れない不安の中で、名古屋大学の門の前に立ったことを鮮明に覚えている。その2、3週間前であったろうか、名古屋大学の合格発表の前日、父を癌で亡くしたことが不安をかきたてたのだと思って来たが、それだけであったか、それ以上の記憶はさだかでない。不安を抱えた状況もあつたか、入学後2、3年間は、名古屋大学から提供される学修の場を有効に生かしたとは言えないし、また生かそうとしなかった。

そんな中で、数学を一生の仕事にしようなどと考えて、数学を勉強し始めたのではなく、数学が比較的好きだという理由で数学を専攻することにした。強い目的意識を持って専攻を選んだわけではないのに、なぜ数学の学修に、後には研究に没頭できるようになったか、その理由を考えてみたが、なかなかこれと言って思いつくものが見当らない。恐らく当時の名古屋大学理学部数学教室には、極めて自然に学修や研究に没頭できる環境が整っていたからであろう。私はそう思っている。現在の名古屋大学の学生に対する辛口の批判として、目的意識が希薄であると言われる。私もそれを否定するものではないが、学生の目的意識を醸成することも教育の大きな目的であることを忘れてはならないと思う。

学修から研究へのきっかけになったのが、修士課程に入学とともに、指導教授（故能代清教授）から渡された1冊の講義録（Les cours de Sorbonne, M. Brelot 著 *Éléments de la théorie classique du potentiel*）と能代先生の言葉、「これは私の専門から離れているので、大変興味深いと思うが、読んではいけません。素人にも分かるように解説して下さい」であった。当時の私にとっては、フランス

語は殆ど未知の言語であった。数学書は、読むものではないとよく言われるが、私の研究への第1歩は、まさしくそれを体験するものであった。1行を理解するのに何日も費やしたことなど、当時を思い出す度に、感慨に浸れる思いがする。その後、昭和41年助手に採用されるとすぐに、能代先生のご配慮により、湯川奨学金で、阪大、京大で研究する機会を得、更にそれから私の研究の基礎を固めたパリ大学での研究生生活が続いた。パリでの研究について思い出を1つと言われたとしたら、指導教授のポージュの別荘で過ごした夏の数日間である。そこで、1939年以来私の研究分野ではかなり有名であった問題に私が解を与える場面があった。私が啞然としている脇で、指導教授がいつまでも興奮していたことを今も懐かしく思い出す。以後の色々な場面が脳裏を掠めるが、研究を優先させる雰囲気名古屋大学に満ち満ちていた。

研究とともに、教育の場もまた、名古屋大学に限られることになった。私にとって、授業は大変楽しい。それが若い有能な学生とのセミナーであっても、大教室の大人数の講義であっても。振り返って、名古屋大学の学生全てが素晴らしい能力を持っていると思う。ただ、学生自身や教官がそれを見出せずに終わってしまうことが如何に多いかである。私は、かつて極めて厳しい状況に置かれた学生に昼食の時間を提供して、彼をほんの少し手助けしたことがある。卒業後の彼の目覚ましい活躍を見るに付け、1例とは言え、教官がタイミングを誤らずに手を差し伸べれば、どんな状況に置かれた学生でも素晴らしい成長を遂げるに違いないと思っている。

国立大学法人名古屋大学におけるこの3つの場が益々発展する様を楽しみにしつつ、お世話になった名古屋大学の皆様に心から御礼を申し述べたい。

名大での36年間を振り返って

金 吉 敬 人



名古屋大学には、昭和38年4月、助手として赴任しました。それから、理学部に25年ほど、情報文化学部10年ほど勤務し、合わせて36年間、研究生活のすべてを名大で過ごしました。このたび無事定年退官を迎えることになりました。妻に言わせると仕事と趣味が一緒に幸せですねと言うことで、多分に周囲の事に気が回らず、多くの人々にご迷惑をかけたと思います。お世話になりました皆様に心からのお礼を申し上げます。

思い起こしてみると、名大と不思議な縁でつながっていたのかも知れません。高校3年生夏まで、文系志望で経済学を専攻しようと思っていました。高三になって初めて物理の授業を選択しました。その時の物理の先生が、名大工学部電気科出身の人でした。授業内容は、特に印象に残っていませんが、物理の教科書を読んだときの面白さ。それと、夏休み中に、旺文社の「受験と対策、物理」を買って読んだときの面白さを思い出します。9月末に、担任に進学志望を聞かれ、「北大理学部の物理に進学しようと思います。」と言ったとき、担任は、驚いて「理学部の物理は、やめろ。」と言われ、「工学部に応用物理があるからそちらを受験しなさい。」と指導してくれました。当時、北海道に国公立の大学は、五校程しかなく、受験生の多くは、東京に出て受験しました。北大も東京で受験できました。北大の受験日の三日前に、早稲田大学第一理工学部の受験日が設定されていて、結局、担任の意見に従って、両校を受験したしだいです。早稲田の応物から偶々、東大でなく京大理学部に進学することになり、博士課程単位取得退学する前に、指導教官が推薦してくれたのが、名大と東北大の二校でした。その時、名大を落ちた人が東北大に採用され、私のほうは、名大

に採用され、東北大は落ちました。そんなことで、昭和38年4月、助手として名古屋大学に赴任しました。

平成4年の9月末、ポーランドの大学の招待から帰国して、まもなく、情報文化学部と言う新しい学部が出来るので行かないかと言う話があり、平成5年10月より情報文化学部在籍する事になりました。情報文化学部に来て、まず驚いたことは授業の多さと多様さでした。大学院の授業、学部の授業（全部内容が異なる）の他に、共通教育の内容の異なる授業と毎週物理学実験を担当しなければなりません。特に、物理学実験は、早稲田の応物で学生実験をしていらいの事で、全く面食らいました。その様な状況だからこそ研究は、理学部に在籍していた時と同様なペースでなければいけないと思ったものです。定年までの10年間に74編の英論文を書き、一応目的は、達せられたのではないかと考えています。

情報文化学部生の学問に対する興味の多様性には、全く驚く事ばかりでした。4年生の卒業研究のために毎年配属されてくる学生は、たいてい、物理学とは異なった学問に興味があり、その内、半分程度の人が、文系の会社に就職希望なので、文系に近い卒業研究のテーマを希望した事です。それではと言うことで、経済学や金融工学の入門書を何冊か読み、4年間程、経済物理学のゼミをし、学生と一緒に学びました。この事は、若い頃に戻ったような気持ちにさせ、楽しいことでした。

最後に、名古屋大学には、大変長い間お世話になりました。法人化を契機として、大学のさらなる発展を祈念しております。

バスの乗客

神谷紀生



朝早く市バスに乗る。通勤のためだ。数年前までは車を利用していましたが、乗り入れ規制によって車通勤ができないことになって以来6、7年になる。直通ルートがないので、バスを乗り継いでおり、所要時間は車の2倍はかかる。朝早くとも、基幹バスは利用者が多い。それに比べて、途中乗り換えで名古屋大学(前、駅名が変わった)まで来るバスは本数が少ないうえに利用者もたいへん少ない。通常3、4人どまり。ほとんどが見慣れた顔ばかりである。

背中を丸くした70歳見当の人がいた。乗り換え停留所は同じであるが起点と終点は違う。ほとんど毎日同じ時刻のバスを利用して。目的地(だろうと思う)へ到着する時間が7時30分以前であった。どんな仕事をするために毎日通っているのか。一度も口を利いたことがないまま、3年前に見かけなくなった。大学、大学院学生であった頃の指導教官になんとなく似ていた。

65歳より若いだろうと思われる人は、いつも元気に運転手に「おはようございます」、「ありがとう」と、乗ったとき、降りるときに言っていた。乗車区間は2駅だけだが、いつもスポーツ新聞を手を持っていた。数年見かけたが、最近突然乗ってこなくなった。定年で退職したのか、リストラになったのか。心配しても仕方がないことだが、この人ならば、リストラではないと思いたい。

高校生の女の子は眼鏡をかけて、気が強そうな印象だった。バスに乗っているのは2区間だけだが、そんな短い時間であっても小さなメモのようなものを見ながら勉強していた。ある日気がついたとき、眼鏡はかけていなかった。今も通学している。

途中から乗ってくる若い女性は名古屋大学前でバスを乗り継いでいた。いつも前の方の決まった席に座る。私はいつも最後尾に近い席だったから、乗り降りする人々の行動がよくわかる。ほとんど正確に同じ時間のバスだった。3年間くらい見かけたが、半年ほど前からは見かけなくなった。バスに乗る時間が変わったのか、あるいは勤め先が変わったのか、辞めたのか。恐らく結婚してどこかに移ったのだろうと勝手に推察している。

青柳町から名古屋大学前行きのバスに乗り、八事日赤

(病院だろう)に行くお年寄りがいた。足が悪いので、杖を使ってゆっくりとしか歩けなかった。月に一度位しか見かけなかったが、よく覚えているわけは、彼女がバスに乗るときに、「八事日赤に行きたいので、名古屋大学前終点に着いたとき、道路の反対側までバスに乗せて欲しい」と毎回運転手に頼んでいたからだ。乗り換えバスが道路の反対側から出るので、そうして欲しいと。このとき運転手の対応は皆十分親切だった。超閑散バスの利点だ。この人はいつも自分一人で病院に行っていたようだ。最近は見かけない。

何の仕事をしているのか、何処へ行こうとしているのか、どうにもはっきりしない男女の二人連れがいる。今でもほぼ毎日見かける。兄妹(あるいは姉弟)のようでもあるが夫婦のようでもある。二人とも痩せている。毎日仕事を探しに行くのか、あるいはパチプロなのか、得体が知れない。乗り降りする停留所が毎日違う。時として別の方面に行くバスを利用する。気になる二人だ。もしかするとポケットを狙っているのかも知れない。

自分も他の乗客から同じような目で見られているわけだ。数行で書くとしたらどうなるのか。ご想像に任せたい。自分ではにんまりとしている。

平成15年12月13日、地下鉄名城線が名古屋大学まで延伸された。バスの路線、時刻は大幅に変更された。定年までには地下鉄が開通するだろうと期待しながら、実現しなかった先輩はたいへん多い。しかし、私は数ヶ月ながら間に合った。

定年退職を前にして思う事はさまざまだ。いろいろな事をエッセイにも書いている。いろいろな人に感謝もしなければならぬ。また反省もしなければならぬ……しかし、ここで明確な区切りを付けようと思ったとき、閑散としたバスで出会いながら話をしたこともなく、またある日以降見かけなくなった人達のことを、何の利害関係もなく、特別の感情を抱いたものでもないにもかかわらず、今の自分の気持ちを落ち着けてくれるような気がしたのだ。フォスターのビューティフルドゥリーマーの歌声や、鴨長明の方丈記の川面が浮かんでくる。

宇宙に夢を馳せて

森 滋 夫



2年間のアメリカ留学から帰って新しい研究テーマを模索しているとき、当時の教授から「NASAが宇宙実験を公募している。やってみないか」と誘いを受けた。高校生時代に夢見た宇宙、ロケット設計技師への夢をつぶされ近くの金大医学部へ、どうしても夢が忘れられず飛び込んだのが名大環境医学研究所「航空医学」部門。しかし、宇宙は遠く、視覚生理学に身を投じようかと迷っていた矢先のこと、なんの躊躇もなく飛びついた。

NASAの公募に対して国が動いた。スペースシャトルが搭載する実験室の半分を借りきって日本の実験をやろうというビッグプロジェクトだった。生命科学系12テーマ、材料系22テーマが選抜され、打ち上げは10年後の1988年と予定された。

魚は、重力の方向と光の方向で姿勢を決め、その制御中枢は小脳にある。無重力下ではこの制御が乱れるにちがいない。その順応過程を、正常鯉と耳石（重力検出器）摘出鯉の行動と脳波から比べようとするものだった。装置開発を三菱重工神戸造船所が担当。しかし装置の仕様が必要だった。搭載ラックから試算すると鯉一匹の水容量はせいぜい4リットルと聞いてびっくり。水族館や活魚輸送に聞いてもそんな経験はないという。

脳波導出には前置増幅器が必要だった。豊橋技科大のグループが重さ1グラム以下の前置増幅器に挑戦した。これを頭に載せて自由に泳げる鯉のサイズは25-30センチメートル。これは成魚のサイズ。狭い容器内で産卵は禁物だ。弥富金魚漁業協同組合の協力で、幼魚でこのサイズの錦鯉を特別に育て、しかも無償で提供していただけることになった。密閉された4リットルの水でこのサイズの魚に酸素を供給し、2週間以上、健康に生かす宇宙用実験装置の開発、それが最初の難関だった。

教授の「人工肺はどうだろう」がブレークスルーとなった。

心臓手術用の人工肺で、血液のかわりに水、酸素のかわりに空気を流す。3年を費やした結果、適当量の水流があれば、小児用人工肺で鯉4匹分の酸素を供給できることがわかった。水路にはゼオライト、活性炭、不織布、と仕様が決まった。このユニークな装置仕様は、現在もなお水棲動物用宇宙実験装置に利用されている。

1986年1月、チャレンジャー号の爆発事故。1991年に実施が延期された。遅れがちだった鯉の行動、脳波解析のための基礎実験によやく時間がとれた。1990年、予定の前年、複雑な3つの生命科学実験に宇宙開発事業団はリハーサルを計画してくれた。ケネディスペースセンターに日本から送った8匹の鯉はすぐ病気になり次々に死亡。水が合わないのだ。心配が現実となった。帰国後、水環境を扱う寿工業の協力を得て対策を練るが時間が足りない。と、その年の12月、プースターロケットの燃料漏れが見つかり予定はさらに1年延期、1992年9月の実施が公表された。

飲料水で鯉の安定化濾床を作る手技を確立、輸送鯉をその濾床水に慣らす手技をフロリダのシーワールドから入手、さらにフロリダ在住の内藤氏（向井宇宙飛行士の弟）宅に緊急用の鯉を用意。ところが、打ち上げ6ヶ月前の本番リハーサルで搭載用容器の鯉が感染で死亡。NASAは再度のリハーサルを要請するがそんな時間的余裕はない。手術中の汚染が原因だ、と逆にクリーンボックスの設置を要求し、本番はまさに背水の陣。

無事に実験が終了したときの快い虚脱感を今でも時々思い出す。恵まれた時代を生きたものだと思う。それを可能にしてくれた大学をはじめ周囲の方々の理解に感謝したい。昨年暮、宇宙実験に協力いただいた民間の方々と10周年の集いを持った。心とむ会となった。実験の成果を報告し、あらためて謝意を表すことができた。

名古屋大学に感謝

佐藤 祐造



私は昭和34(1959)年滝子にありました教養部に入学し、36年医学部(鶴舞)に移り、昭和40年卒業しました。インターン終了後大学院生として医学部第三内科に入局、学位(医学)取得後、たまたま公募されていた本学保健管理センター設置準備要員としての医学部助手に採用されました。昭和50(1975)年保健管理センターは教養部保健体育科と合併、総合保健体育科学センターが発足しました。以後も継続して勤務し、今日に到りましたので、滝子・鶴舞・東山キャンパスと合計45年間 インターン、留学時代を除けば43年間)名古屋大学で学び続けることができました。本当に有難うございました。心から御礼申し上げます。

その間、入学しました昭和34年には伊勢湾台風があり、大学は休講となり、港区、南区など災害地に救援活動に行きました。翌35年には60年安保があり、毎日のようにデモ行進に参加しました。樺美智子さんが死亡されるという悼しい事件も想い出されます。昭和43、44年には大学紛争があり、豊田講堂、大学本部、医学部では事務棟が一部の学生によって封鎖されました。当時私は医学部第三内科糖尿病班に所属し、肝臓の灌流実験を10人近いグループで行っていました。臨床系の研究室も封鎖される可能性が高いとの情報があり、実験終了後の深夜には幹事役のN先生が各人の実験ノートを集め、車のトランクに入れ帰宅していました。

医学部卒業の時点で、私は何か少しでも医学の発展に貢献したいと考え、5年間は研究に従事しようと大学院に入りました。その後も5年間保健管理センター助手(医学部助手も併任)として、大学の保健管理体制の確立に尽力したり、医学部教育の一部も分担する機会がありましたので、総合保健体育科学センター発足後には大学を辞め、父親の後を継ぎ開業する心積もりでいました。

ところが、講師に昇任させていただくこととなり(教授で

定年を迎えるとは夢にも思いませんでした)、何か生涯にわたる研究テーマを考え、糖尿病学全般にわたり種々文献を読み、熟考の結果、当時ほとんど手がつけられていなかった運動療法について研究をすることとなりました。しかし、具体的なアプローチに苦慮しており、とりあえず体育科学部教官と協力、肥満を成人病(現在の生活習慣病)の前段階と考え、「肥満学生に対するサマーキャンプ」を厚生補導特別企画で立ち上げ、食事、運動など生活習慣全般の指導を合宿セミナーの形式で12年間実施しました。「生活習慣病」、「健康日本21」、「健康増進法」など生活習慣教育の重要性が強調されている今日、先駆的試みと自負しています。

たまたま、昭和53(1978)年文部省在外研究員として、スウェーデンカロリンスカ研究所へ留学する機会があり、正常血糖クランプ法を修得致しました。帰国後この方法を用いてトレーニング効果の生化学的評価、運動療法の臨床応用に関する研究を行いました。平成3(1991)年から大学院医学系研究科を担当することとなり、大学院生を指導し、動物実験的に覚醒下で正常血糖クランプを行う方法も確立し、糖尿病・肥満・老化と運動との関連だけでなく、漢方医学の研究にも活用しています。分子生物学的アプローチの研究も行いました。

30年余り自己独自の方針で研究室、動物舎、研究器材を整備し、研究仲間を拡大できたのも一重に名古屋大学の先輩、同僚の皆様のご配慮の賜であると感謝しております。各個人が思うがままに学術研究を展開できる環境を尊ぶ自由闊達な進取の気風を今後もぜひ続けていただきたいと思います。

国立大学法人名古屋大学の尚一層のご発展を心より祈念し、筆を擱きます。

名古屋大学を去るにあたって

高橋俊彦



1959年名古屋大学に入学し、当時教養部のあった滝子に通い始めて以来45年の月日が流れた。この間、精神科専門病院である静岡県立病院養心荘に勤務した10年間余りを除き、35年間近く名古屋大学に通ったことになる。滝子の教養部時代は最初の年が伊勢湾台風のための救援活動、2年目は「60年安保」をめぐるデモなどとあわただしい雰囲気の中に過ぎた。

鶴舞の医学部を卒業した後、附属病院における1年間のインターンを修了し、大学院は精神医学を専攻した。精神医学教室の精神病理研究グループでは、当時精神分裂病（現在の統合失調症）と診断されていた症例の一部を分裂病とは区別して「思春期妄想症」という新しい臨床単位を提唱しようということで、植元行男助教授（故人）のもとに、若手の先輩たちが集まり、熱心な討論が繰り返されていた。その雰囲気に魅せられ私もその一員に加えていただいた。

精神科専門病院に長く勤めていたことや属している研究グループの関係等で、私の研究上の関心は精神科領域の中核であり、最も深刻な病と言われる統合失調症（以前の精神分裂病）およびその周辺にあり、特に妄想という不思議な現象にとりつかれた。

精神医学における妄想とは大雑把に言えばヤスパースの言うように、確信が強く、合理的な説明によっても訂正不可能な誤った考えのことを言うのであるが、妄想の存在は、他の精神医学における多くの症状と同様、面接における言葉によって把握するのであり、血圧とか血糖値のように数値で出たり、がん細胞のように目に見えるものでもない。統合失調症の妄想は了解不能と言われるが、我々が他人の考えが分かる（と思っている）ということはどういうことなのか、言葉により他人の考えを了解するということが本当に可能なのか、等々哲学的とでもいべき人間関係の基礎的

なところが問題になることもある。そういう点で1991年鶴舞から東山キャンパスにある総合保健体育科学センターへと転任するにあたり、ひょっとして文科系の先生方のお話を聴ける機会に恵まれるのではないかという期待をもったが、時間的余裕のなさのためにその願いは叶えられなかった。

東山に移ってからは、全学教育における精神健康教育、保健管理室における精神健康（メンタルヘルス）相談、大学院医学研究科精神健康医学の担当等が業務となり、精神科領域の中では軽症例と関わることになった。特に軽症うつ病の治療あるいは、啓発活動の必要性を感じるようになったのは、うつ病の生涯有病率は現在では約15%と言われ、悪い条件が加われば誰にでもうつ病に罹りうるからである。加えて「うつ病」と言う言葉を、ほとんどの人は聞いたことがあり、それなりの知識をもっているにも拘わらず、実際にうつ病の人がいてもその人が周囲の人々にうつ病とは認識されていないために、よくない結果を招くケースが世の中には少なからずあるからでもある。名古屋大学においても例外ではないため、私は少なくともうつ病の学生にとってはしばしばお役に立つことができた。

省みるに、名古屋大学での前半は精神医学教室の笠原嘉教授を始め、先輩の方々にお世話になりながら自分なりに経験を積み成長した時期であり、加藤雄一教授の後任として着任した後半の東山地区では、その恩返しを後輩たちにすることができた時期でもあった。

4月から国立大学は、法人化されることになった。大学の危機とも言われているが、種々の困難を克服して、名古屋大学がますます発展することを願っている。

最後に、これまで実に多くの方々の温かいご支援、ご厚情を賜りました。定年を迎えるにあたり、ここに記して心より感謝申し上げます。

神経一筋標本

宮村 實晴



私は中学あるいは高校の体育教師になりたいと思い昭和34年金沢大学教育学部に入学しました。専攻科でたまたま生理学実習に参加したことが私の人生を大きく変えたと言っても過言でないかもしれません。すなわち、神経一筋標本の実習において生まれてはじめて殿様カエルの腓腹筋の1端を固定し他の1端に重りを下げ、筋や坐骨神経に電気刺激を与えました。するとカエルの筋が動くではないか！それまで肉屋の店頭に並ぶ牛肉や豚肉は死んでしまった以上決して動かないと堅く信じていた私にとっては大変な驚きでした。あまりの不思議さに担当教官にお願いして別の日にもう1回1人でこの実習を行ないました。そして将来にわたりこのような実験が毎日できれば楽しいだろうと考え、両親の反対を押し切って大学院に進学しました。この考えが正しかったか否かは今もって解りません。

大学院では主に心拍出量に関する実験を行ないましたが、その結果を南山大学で開催された学会で発表しました。発表の後、恩師の故猪飼道夫教授や仲間と共に松井秀治先生の案内で名古屋大学（保健体育科）を見学させていただきました。当時、名古屋大学は引越して間もない頃で山手通はすべて舗装されておらず、学内は所々赤土が見え東山動物園まで歩きその後市電で今池の旅館まで行った記憶があります。その時には名古屋大学に勤務するとは夢にも思いませんでした。

名古屋大学総合保健体育科学センターは、全国に先駆けて、大学の保健体育が担う教育・研究および保健管理業務を総合的に推進するための全学共同利用施設として昭和50年4月1日に創設されました。センター発足時には、大学院も担当するという構想であったことから松井先生からお誘いを受け昭和49年に名古屋大

学に赴任しました。ただし、センター発足当初は、大学院を担当することはできませんでした。それは教養教育（保健体育）の授業を担当した上でさらに大学院を担当するには困難であるというのが第1の理由でした。しかしながら、平成3年本センターの一部の教官ではありましたが名古屋大学大学院医学研究科健康増進科学を兼担することができ、われわれの研究室にも大学院生が入ってきました。大学院生が加わり研究室が活気づいたことは言うまでもありません。

本センターにおいて仲間や大学院生と共に主に運動や身体トレーニングと呼吸に関する実験を行なってきました。中でも海女やヨーガ訓練者を対象にした実験は印象的でした。特に1分間に1回（ウジャーイ）の呼吸ができるヨーガ訓練者の呼吸の化学感受性は、一般人の約1/3であることが判明しました。この低い呼吸の化学感受性は遺伝的要因と長期間のトレーニングの効果であろうと推測しています。さらに運動時の換気亢進の神経性要因をさぐるために熟睡している大学生（被験者）の脚を軽く動かしたところ換気応答は覚醒時のそれと比べ約2倍であったことは予想外でした。やはり実験はやってみるものであると痛感した次第です。これまで健康なヒトを対象に好きな実験を行なってきましたが、名古屋に来てちょうど30年になりました。正に「光陰矢の如し」です。この間実に多くの方々とお会いすることができ、そして皆様から色々親切にいただきました。この紙面をお借りして心よりお礼申し上げます。本当に有難うございました。

30年前にはグリーンベルト横の小さかった楠の木も今では立派な大木になりました。この楠の木と同様、名古屋大学が今後とも益々発展されることを祈念致しております。

歳を取るということ

中野 紀和男



「歳を取るということはありがたいことである」と言えば、すぐ「？」と帰って来そうである。作家の杉浦民平さんは「歳をとって良いことなど何一つ無い。」と言ったし……。

しかし今、私は本当に「歳を取るということはありがたいことだ。」と思っている。1966年に本学の助手にして頂いてから37年、生命科学の研究・教育に従事する中で、あるいはそれらよりもっと大切なことは、「自分とはなにか、生きる意味とはなにか」の回答を出すことであると思いつけてきた。欧米の科学者は幼時からの長く、深い宗教生活からごく自然に、「研究活動を通じて神に報恩する。」と考えていると言う。上記の回答を引き出すための窓口が、「神」とは何か、老子のいう「道（タオ）」や仏教で言う「空」とは何かを知ることだろうとは思っていた。そのためには「般若心経」や道元の「正法眼蔵」、鈴木大拙の「禅による生活」などを理解することが必要なだろうと考えていた。以来多くの関連する本を読み、キリスト教の教会に3年、禅道場に15年、スリランカの修行道場へも行って瞑想をしてきた。それ故か、あるいはもともと体質なのか、幾つかの霊的体験もしてきた。しかしそれらの本質はいずれも難解で、少しも回答は得られなかった。その間の失敗の積み重ね、苦い経験や後悔の連続……。

それがつい昨年、「タオ」や、「空」、「神」の概念が突然、霧の晴れるようにわかって来た。永年まったく理解出来なかったが、それらはいずれも同じことを言っていたのだ！さらにそれらと密接に関連する「自分がこの世に生きる意味」、「時代や国、宗教の違いによって変わる価値観などに左右されない生きる上での原点」などについても。

私のように、それらの本を読むのは研究・教育の合

間、考えるのもそれほど突き詰めるのではなく…といった取り組み方では、短期間での理解はとても無理だったのだろう。幼時からの宗教経験も乏しく、哲学者でも僧でもない私には、雑多で断片的な知識がまつまり、熟成するためには永い年月が必要だったのだろう。「タオ」や「空」の意味、老子と孔子の思想の決定的相違、人がこの世に生きる意味、「神とは」そして「宇宙とは」……。実に楽しい毎日だった。それらが30年、40年かかって判るためには、どうしても健康で歳を取らねばならない。幼時から身体が頑健でなかった私は人一倍健康には注意してきた。さらに今、静かに振り返って見た時、どれほど多くの人達によって自分の人生が支えられてきたことか。研究上でも個人的問題についても親密な指導をして下さった恩師、宗教界の先師達、研究を支えてくれた先輩、同僚や指導生の皆さん、そして両親や家族達……。心の底から感謝の念が湧いて来る。「人は自分だけでは生きられない。」この「当たり前のこと」を改めて噛み締めている昨今である。

しかし「わかった」と言っても実はようやく「ほんの入口に達したに過ぎない。」「日々の生活の中でそれを活かしてゆかなければ意味がない。」との師のお言葉は当然である。私にとってはそのためのチャンス、残りの人生は限られている。幸いにも退官後は私学へ移り、短大を4大の学部改編するためのお手伝いすることになっている。それを成し遂げたあと10年間、管理栄養士を育ててゆく。その実践の中で、できる限り「わかったこと」を活かして行きたいものである。それを成し遂げるためにも元気で歳を取って行かねばならない。歳を取ること、やはりそれは素晴らしいことである。

本誌に関するご意見・ご要望・記事の掲載などは企画広報室にお寄せください。

総務部 企画広報室 企画広報掛

電話：052（789）2016

FAX：052（789）2019

E-mail：kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

